北淡町

久野々遺跡

―― 一般農道整備事業（仁井Ⅱ期地区）に伴う発掘調査報告書 ――

平成9年3月

兵庫県教育委員会

北淡町

久野々（くのの）遺跡

遺跡の遠景　〔東上空から〕

第４次調査・ＳＨ１〔北西から〕

例　言

1．本書は、兵庫県津名郡北淡町に所在する久野々（くのの）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、兵庫県洲本土地改良事務所の委託を受けて一般農道整備事業（仁井Ⅱ期地区）に伴って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。平成七年度には東区の全面調査（調査担当　山上雅弘　服部寛）、平成八年度にはⅡ・Ⅳ区の確認調査及びⅠ・Ⅱ区の全面調査（調査担当　別府　洋二　仁尾一人）を実施した。

3．久野々遺跡については、県営農業基盤整備事業に伴い北淡町教育委員会が、平成元年度・二年度に確認調査（第1次調査）を、平成七年度に一部全面調査（第2次調査）を実施している。本書にその調査結果の一部を掲載することができた。第1次調査については伊藤宏幸（津名郡町村会）、第2次調査については川吉知子（北淡町教育委員会）によるものである。

4．また、久野々遺跡の北側に接するおぎわら遺跡は国営農地開発事業・北淡路地区及び県営一般農道整備事業（仁井地区）に伴った発掘調査を昭和63年度に兵庫県教育委員会（調査担当　長谷川眞　久保弘幸　甲斐昭光　高瀬一嘉）が実施した。おぎわら遺跡は久野々遺跡と同一遺跡である可能性があるため、本書にその調査結果の一部を報告することにした。

5．本報告書に使用した写真は、図版1は国土地理院発行のものを使用した。航空写真は第3次調査ではアジア航測株式会社、第4次調査では株式会社ジェクトに撮影を依頼したものを使用した。遺構写真は各調査担当者によるものである。

6．第3図は国土地理院発行の地形図をもとに作成した。また、第4図は北淡町作成のものをもとに作成した。

7．本書に掲載した遺物の番号の頭にはアルファベットを付して出土地点を区別している。おぎわら遺跡出土のものには0、久野々遺跡第1次調査出土のものにはT、久野々遺跡第2次調査出土のものにはH、久野々遺跡第3・4次調査出土のものにはKを付している。

8．執筆・レイアウトは各発掘担当者によるもので、目次にその文責を記している。本書の編集は別府が主として行い、甲斐の補助を得た。用語等は統一に努めたが、原則的に執筆者によっている。

9．出土遺物や発掘調査に係る写真等の資料は各々調査に関わった兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および津名郡町村会・北淡町教育委員会で保管している。

10．発掘調査に際しては、兵庫県洲本土地改良事務所、津名郡町村会、北淡町教育委員会、北淡町立歴史民俗資料館、佛橋詰建設、神田恵子さん、嶋田富美子さんおよび久野々地区の方々にお世話になった。記して感謝します。

目　　次

巻頭図版　遺跡の遠景
第４次調査・ＳＨ１

本文目次

第１章　遺跡をとりまく環境 …… （別府洋二） …… 1
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　周辺の遺跡分布 …… 3

第２章　調査に至る経緯と経過 …… 5
第１節　調査に至る経緯と経過 …… （別府） …… 5
第２節　調査体制 …… （別府） …… 6
第３節　おぎわら遺跡の調査 …… （甲斐昭光） …… 8
第４節　久野々遺跡第１次調査 …… （伊藤宏幸） ……13
第５節　久野々遺跡第２次調査 …… （川吉知子） ……17

第３章　第３次調査 …… （山上雅弘　服部　寛） ……21
第１節　調査の経緯 ……21
第２節　調査区周辺の地形 ……21
第３節　遺構 ……24
第４節　遺物 ……25
第５節　小結 ……27

第４章　第４次調査 …… （仁尾一人） ……29
第１節　Ⅰ区の調査概要 ……29
第２節　Ⅰ区の遺構 ……33
第３節　Ⅱ区の調査概要 ……43
第４節　Ⅱ区の遺構 ……43
第５節　Ⅰ・Ⅱ区の遺物 ……44

第５章　まとめ …… （別府） ……49

挿図目次

	第１図	町石拓影…… 1
	第２図	津名郡における弥生時代の遺跡…… 2
	第３図	遺跡の位置…… 4
	第４図	調査区位置図…… 7
おぎわら遺跡	第５図	おぎわら遺跡全体図…… 9
	第６図	おぎわら遺跡竪穴住居……10
	第７図	おぎわら遺跡出土土器（１）……11
	第８図	おぎわら遺跡出土土器（２）……12
久野々遺跡第１次調査	第９図	№15調査区段状遺構出土土器……14
	第10図	№２調査区竪穴住居址出土土器……15
	第11図	№８調査区包含層出土土器……15
	第12図	出土石器……16
	第13図	土人形……16
久野々遺跡第２次調査	第14図	第２次調査全体図・土層図……18
	第15図	ＳＨ－01出土土器……19
久野々遺跡第３次調査	第16図	第３次調査全体図……22
	第17図	遺構配置図……23
	第18図	溝ＳＤ３……24
	第19図	井戸ＳＫ３……24
	第20図	埋桶ＳＫ５……24
	第21図	出土遺物……26
久野々遺跡第４次調査	第22図	Ⅰ区遺構配置図（北半部）……30
	第23図	Ⅰ区遺構配置図（南半部）……31
	第24図	ＳＨ１……32
	第25図	ＳＨ１中央土坑……33
	第26図	ＳＨ２・３……35
	第27図	ＳＸ１・２……36
	第28図	ＳＸ１内ＳＫ１５……37
	第29図	ＳＸ３・４……39
	第30図	溝土層図……40
	第31図	調査区西壁土層図……42
	第32図	Ⅱ区遺構配置図・土層図……43
	第33図	出土土器……45
	第34図	出土石器(1)……46
	第35図	出土石器(2)……47
	第36図	おぎわら遺跡・久野々遺跡出土鉄器……48

写真図版目次

図版1　航空写真
図版2　遠景（1）
図版3　遠景（2）
図版4　おぎわら遺跡／遺構（1）
図版5　おぎわら遺跡／遺構（2）
図版6　おぎわら遺跡／遺構（3）
図版7　おぎわら遺跡／遺構（4）
図版8　おぎわら遺跡／遺構（5）
図版9　久野々遺跡（第1次調査）／遺構
図版10　久野々遺跡（第2次調査）／全景
図版11　久野々遺跡（第3次調査）／遺構（1）
図版12　久野々遺跡（第3次調査）／遺構（2）
図版13　久野々遺跡（第3次調査）／遺構（3）
図版14　久野々遺跡（第3次調査）／遺構（4）
図版15　久野々遺跡（第3次調査）／遺構（5）
図版16　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（1）
図版17　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（2）
図版18　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（3）
図版19　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（4）
図版20　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（5）
図版21　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（6）
図版22　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（7）
図版23　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（8）
図版24　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（9）
図版25　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（10）
図版26　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（11）
図版27　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（12）
図版28　久野々遺跡（第4次調査）／遺構（13）
図版29　おぎわら遺跡／土器（1）
図版30　おぎわら遺跡／土器（2）
図版31　おぎわら遺跡／土器（3）
図版32　久野々遺跡（第1次調査）／土器（1）
図版33　久野々遺跡（第1次調査）／土器（2）
図版34　久野々遺跡（第1次調査）／土器（3）
・石器・土製品
図版35　久野々遺跡（第2次調査）／土器
図版36　久野々遺跡（第3次調査）／土器
図版37　久野々遺跡（第4次調査）／土器（1）
図版38　久野々遺跡（第4次調査）／土器（2）
図版39　石器・金属器

第1章　遺跡をとりまく環境

第1節　地理的環境

淡路島によって瀬戸内海は播磨灘と大阪湾に分けられるのみならず、畿内とその西側を隔てる位置にあり、それがゆえに歴史上重要な地域として現れる。例えば室町時代には細川氏や三好氏による都における騒乱の前線基地として、また織田信長・豊臣秀吉は西国の毛利氏と本願寺の補給路を断つための拠点として淡路島を掌えている。このように淡路島は政治的・社会的な交通の要衝として位置づけることができ、現在では、鳴門大橋が開通し、また明石海峡大橋が完成間近となり、更に紀淡海峡をも結ぶ計画が具体化していくなかで、新たな交通の要衝としての淡路島が浮かび上がっている。

淡路島の地形は東西方向の中央構造線に沿った南部の諭鶴羽山地と、それより約30°北よりに角度を変えた北部の脊梁山地に大きく分けられる。この北部の山地は明石海峡を隔てて六甲山地・北摂山地へと続く。この北部の山地の地形形成には断層活動が大きく関与していることは、兵庫県南部地震(1995)で大きく活動した野島断層や、伏見地震(1596)で活動したと考えられる東浦断層や楠本断層等の存在からも伺われる。これらの断層によって海岸には切り立った崖が迫っており、また山地と丘陵・台地の境界が比高差50～100mの崖状の地形によって大きく分けられている。

淡路島北部は南西から北東へと長く延び、その幅はわずかに5～10kmに過ぎない。しかしながらこの北部の津名郡内には海岸線と河川流域にわずかに低地が存在するのみで、地形のほとんどが山地・丘陵・台地である。

淡路島北部を貫く山地はこの久野々・仁井・舟木周辺で鞍部となり、大磯フェリー乗場のある東浦町から富島港や浅野のある北淡町までの東西の海岸を結ぶ交通路となっている。この鞍部でも標高150m以上を測っており、久野々断層などの東西方向の断層や開析谷も含めて入り組んだ地形を展開している。津名郡北淡町字久野々に所在する久野々遺跡はこの山地鞍部の南辺に立地し、標高250mを越える丘陵・台地上に立地する遺跡である。

遺跡から播磨灘に面した西浦の海岸までは約2.5km、大阪湾側の東浦の海岸までは約4.5kmの距離になる。高地に立地するため遺跡からは播磨灘がよく見渡せ小豆島・家島諸島から播磨の海岸や山々まで臨むことができる。さらに今回調査を行った地点の最高所からは東浦を通して大阪湾北岸まで見通すことができる。

第1図　町石拓影（部分）

久野々の地名は戦国期から見られ、江戸時代元和元年からは阿波国徳島藩領津名郡久野々村となり、明治10年仁井村・舟木村・長畠村と合併、仁井村の一部となる。大正時代仁井村の大字の久野々組となり、昭和30年北淡町久野々となる。

久野々には栗村山常隆寺があり、寺伝によると延暦24年(805年)桓武天皇が、皇弟早良親王の霊を慰めるための勅願寺として建立したもので霊安寺と呼ばれ、大永年間（15世紀前半）に兵火にあったと伝えられている。調査地点の横を常隆寺への参道が通り、周辺にもいくつかの町石が残されている。

	遺跡名	時期	備考		遺跡名	時期	備考		遺跡名	時期	備考
1	塩壺遺跡	V		10	おぎわら遺跡	V		19	老ノ内遺跡	IV	縄文後期あり
2	塩壺西遺跡	V		11	久野々遺跡	V		20	火打角遺跡	V	
3	舘遺跡	I～VI	縄文から継続	12	堂の前遺跡	I	縄文から継続	21	大向遺跡	IV	
4	今出川遺跡	I～VI	II・IV期未確認	13	円城寺遺跡	V		22	あのこし遺跡	V	
5	大坂遺跡	V		14	本田谷遺跡	V		23	富山遺跡	V	
6	白山真土遺跡	V		15	延命寺遺跡	V		24	蒼住遺跡	V	
7	免山遺跡	V		16	品ケ谷遺跡	IV～V		25	筒谷遺跡	IV	
8	尼ケ岡遺跡	V		17	江原遺跡	V		26	外ケ鼻遺跡	IV	縄文後期あり
9	梅木遺跡	V～VI		18	天神遺跡	IV					

第２図　津名郡における弥生時代の遺跡（伊藤宏幸作成）

第2節　周辺の遺跡分布

淡路島北半の津名郡内の遺跡を概観すると、時代によって立地や密度に非常に偏った分布を示している。縄文時代の遺跡は有舌尖頭器が採集されていたり、北淡町育波堂の前遺跡などが知られていたが、近年の発掘調査で早期の押型文土器が出土した釜口船頭ケ内遺跡（東浦町）や、前期から晩期にかけての遺物が出土し後期・晩期の住居址や貯蔵穴が検出された佃遺跡（東浦町）、抉状耳飾りが出土した丸山遺跡（東浦町）、後期の住居址が検出された外ケ鼻遺跡（五色町）など海岸付近の標高20～30mに立地する遺跡が次々と確認されている。

しかしながら水稲耕作が開始された弥生時代前期から中期中頃までの遺跡は海岸付近の比較的低地に点的に遺物は発見されてはいるものの、竪穴住居址などの遺構はほとんど検出されていない。

これに対して弥生時代後期に入ると遺跡数は70数ケ所と爆発的に増加し、そのほとんどが標高100mを越える丘陵・台地上に立地するようになる。今回報告する久野々遺跡や近接するおぎわら遺跡で検出された竪穴住居址の総数は13棟以上になる。また、久野々遺跡の約3km北東にある舟木遺跡（北淡町）や淡路縦貫道路に伴って調査された尼ケ岡遺跡・禿山遺跡（東浦町）、塩壺遺跡・塩壺西遺跡（淡路町）などでも竪穴住居址が検出されており、北淡路で検出された竪穴住居址の8割以上は弥生時代後期に属する。

続く古墳時代に入ると、丘陵・台地上の集落遺跡はほとんど消滅してしまい、かえって狭い海岸線に遺跡が出現するが、これらの遺跡は一般の集落とは異なる製塩遺跡である。古墳時代の竪穴住居址は製塩遺跡のものを含めても数棟しか確認されていない。また、古墳そのものもわずか20数基しか確認されていない。

このように北淡路の古墳時代以前の遺跡は、弥生時代後期を頂点として山間部に分布し、その前後の時期は極端に少なく海岸付近にわずかに分布するという傾向を示している。

では北淡路、津名郡内の弥生時代後期の遺跡分布を見ると、幾つかの地域でまとまりをもって分布していることがわかる。南半部では西浦側の鳥飼川流域および郡志川流域に分布し、河川流域の平地を臨む位置にある。段丘上とはいえ平地の集落も存在している。また中部では東浦側の志築の北側に非常に多くの遺跡が集中する。ここも平地を臨む立地であり、小河川流域に分布する。北端部では明石海峡に面した東浦側に集中している。これらの平地部を望んだ立地や沿岸部に立地する集落址以外に、北半部で西浦から東浦にかけて帯状に分布していることがわかる。この分布は前述の山地の裾部に重なり、丘陵・台地上の立地ながら比較的平坦な地形が広がっている。この分布域の西浦側に今回報告する久野々遺跡やおぎわら遺跡、近年発掘調査が継続している舟木遺跡などが存在し、東浦側の平地に面した位置に白山貝土遺跡・禿山遺跡・尼ケ岡遺跡などが存在する。

〔参考文献〕

水野清秀・服部仁・寒川旭・高橋浩『明石地域の地質』　通商産業省工業技術院地質調査所 1992

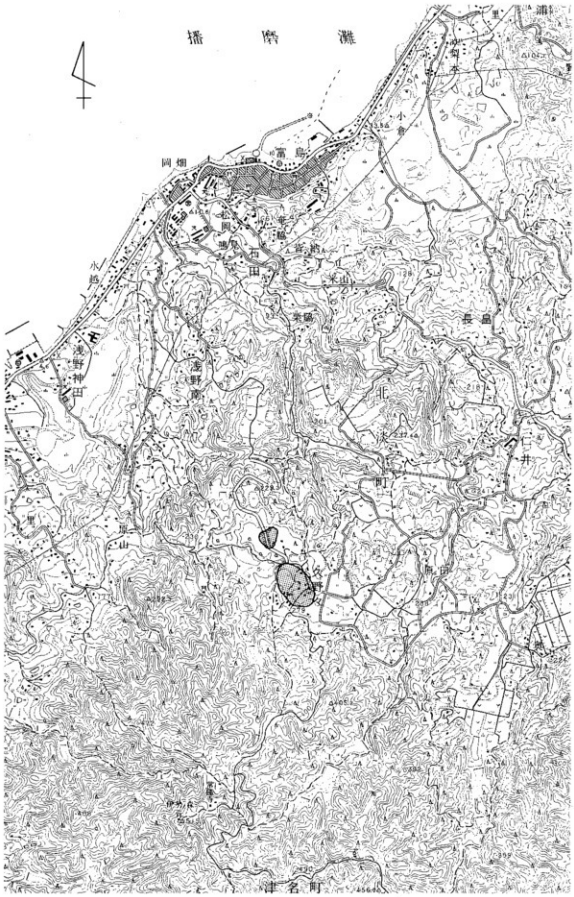
水野清秀・服部仁・寒川旭・高橋浩『洲本地域の地質』　通商産業省工業技術院地質調査所 1994

岡本稔「淡路島の遺跡概観」『古代文化』第23巻　第5・6号　財団法人古代学協会 1971

竹内理三編　『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』角川書店 1988

橿本誠一・松下勝『日本の古代遺跡3　兵庫南部』保育社 1984

伊藤宏幸他『製塩遺跡Ⅰ（津名郡）』兵庫県生産遺跡調査報告第2冊　兵庫県教育委員会 1992



第3図　遺跡の位置（1／25,000）

第2章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯と経過

久野々遺跡は淡路島北部の津名郡北淡町字久野々に所在する遺跡である。久野々・仁井・舟木周辺では従前から所々で弥生土器を採集することができ、北淡町立歴史民俗資料館にも一部の遺物が収蔵されている。近辺でも両提遺跡や金坪遺跡・穴郷遺跡などの散布地が知られていた。

おぎわら遺跡の調査　昭和62年度に国営農地開発事業及び県営一般農道整備事業の工事中に淡路考古学研究会によって発見されたおぎわら遺跡は、昭和63年2月の確認調査の結果を受けて、昭和63年度に全面調査が実施され、弥生時代後期の大量の土器等を伴って竪穴住居址6棟などの同時代の遺構が検出された。(第2章第3節掲載)

さらに平成元年仁井地区で計画された県営ほ場整備事業に先立って久野々工区全域の分布調査が淡路考古学研究会によって行われ（事業主体北淡町教育委員会）、広い範囲で弥生時代を中心とする遺物が散布していることが判明した。

久野々遺跡第1次調査　そのため平成元年度から2年度にかけて、合計87ケ所で確認調査が津名郡町村会によって実施され（事業主体北淡町教育委員会）、25ケ所以上の地点で遺物包含層や遺構が確認された。その結果、弥生時代の竪穴住居址などの集落跡を中心として、土製の小仏像なども出土し、中世から近世までの複合遺跡であることが判明した。(第2章第4節掲載)

久野々遺跡第2次調査　この確認調査の結果を受けて、ほ場整備事業によって破壊される部分について北淡町教育委員会が平成7年度に一部全面調査を実施し、弥生時代後期の竪穴住居址3棟や溝・段状遺構などを検出した。(第2章第5節掲載) 同時に今回報告分以外にも全面調査および確認調査を実施している。

久野々遺跡第3次調査　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所は同じく平成7年度には兵庫県洲本土地改良事務所が計画する一般農道整備事業に伴って、平成8年1月12日から3月15日にかけてⅢ区(1218㎡) の全面調査を実施した。(第3章掲載)

久野々遺跡第4次調査　さらに平成8年度には一般農道整備事業の残るⅠ区の全面調査及びⅡ区・Ⅳ区の確認調査を行い、Ⅱ区の一部については全面調査も実施した。調査期間は平成8年5月20日～8月20日、調査面積は2573㎡である。(第4章掲載)

久野々遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業に伴ったものとして平成8年度も引続き実施されているが（第5次調査)、一般農道整備事業に関わる発掘調査は完了したため、兵庫県洲本土地改良事務所と協議の結果、同じく平成8年度内に調査報告書作成を行うことになった。

久野々遺跡周辺の遺跡調査は以上のように、数次にわたって調査担当を異にして行われている。遺跡の全体像を把握する必要性から兵庫県洲本土地改良事務所の承諾を得て、関連事業に伴って発掘調査を実施したおぎわら遺跡の調査成果および、北淡町教育委員会・津名郡町村会の発掘調査の成果の一部を本報告書に掲載することにした。

第2節　調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所における発掘調査体制および整理体制は以下の通りである。

平成7年度発掘調査体制（第3次調査）

所　長	青木正之
副所長	渡邉　清　龍見祐輔
企画調整班	大村敬通（主任調査専門員）　種定淳介
総務課	石井　守（総務課長）　岩沢重則
調査第3班	小川良太（調査専門員）　山上雅弘　服部　寛

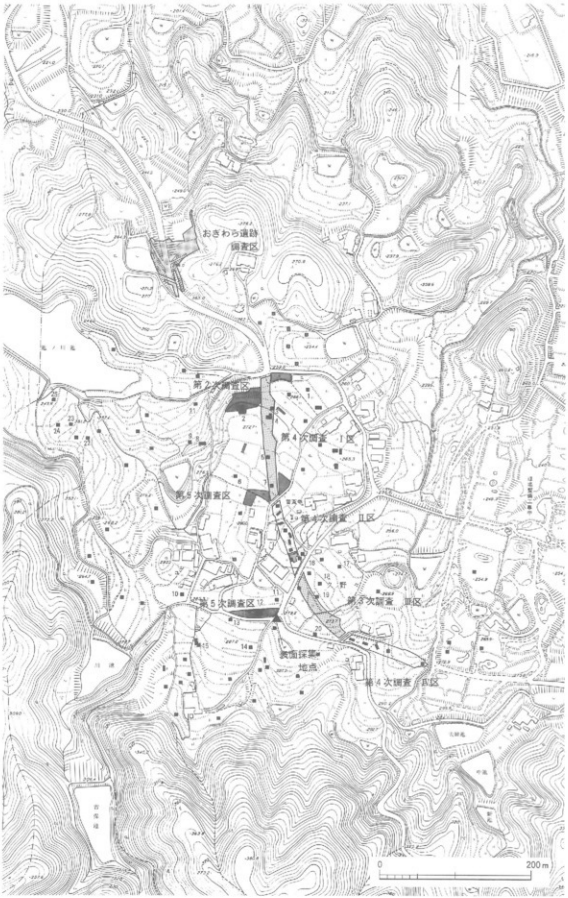
平成8年度発掘調査体制（第4次調査）

所　長	青木正之
副所長	木下　猛　龍見祐輔　大村敬通
企画調整班	輔老拓治（主任調査専門員）　鈴木敬二
総務課	石井　守（総務課長）　新野敦司
調査第3班	小川良太（調査専門員）　別府洋二　仁尾一人

平成8年度遺物整理体制

所　長	青木正之
副所長	木下　猛　龍見祐輔　大村敬通
企画調整班	輔老拓治（主任調査専門員）　鈴木敬二
総務課	石井　守（総務課長）　新野敦司
整理担当調査員	別府洋二　山上雅弘　仁尾一人　服部　寛
整理普及班	岡崎正雄（調査専門員）　加古千恵子　甲斐昭光
	八木和子　松本　睦　古谷章子　西海奈津子　木村淑子　茨木恵美子
	前田千栄子　西野淳子　飯田章子　吉田優子　山口幸恵　真子ふさ恵
	和田寿佐子　横山麻子　田中　葉

尚、本報告書に掲載している久野々遺跡第1次調査および第2次調査分の資料整理については、各々津名郡町村会の伊藤宏幸、北淡町教育委員会の川古知子がおこない、一部兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が補助した。


おきわら遺跡
調査区
第2次調査区
第4次調査 I区
第5次調査区
第4次調査 II区
第5次調査区
第3次調査 III区
表面採集
地点
第4次調査 IV区
0
200m

第4図　調査区位置図

第３節　おぎわら遺跡の調査（第５～８・36図，図版４～８，29～31・39）

おぎわら遺跡は、久野々遺跡の北方約200ｍに位置する弥生時代後期の集落遺跡である。標高約260ｍの丘陵上に立地するこの遺跡からは、播磨灘、明石海峡を挟んで、遠く東播磨から西摂津の地を望むことができる。この遺跡は工事中に発見されたもので、昭和63年２月の確認調査の結果に基づき、県教育委員会が事業予定地内の全面調査を実施した。立地、時期、遺跡の性格の点で久野々遺跡と密接な関係があるため、公表されていなかった調査成果の一部を以下に収録する。なお、第５・６図の標高は東京湾平均海水準を基準とし、方位は座標北を示している。

所在地　津名郡北淡町大字久野々

調査の契機　国営農地開発事業（北淡路地区）および県営一般農道整備事業（仁井地区）

調査期間　昭和63年10月24日～12月27日

調査面積　2,620㎡

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査担当者　同上　技術職員　長谷川眞・久保弘幸・甲斐昭光・高瀬一嘉

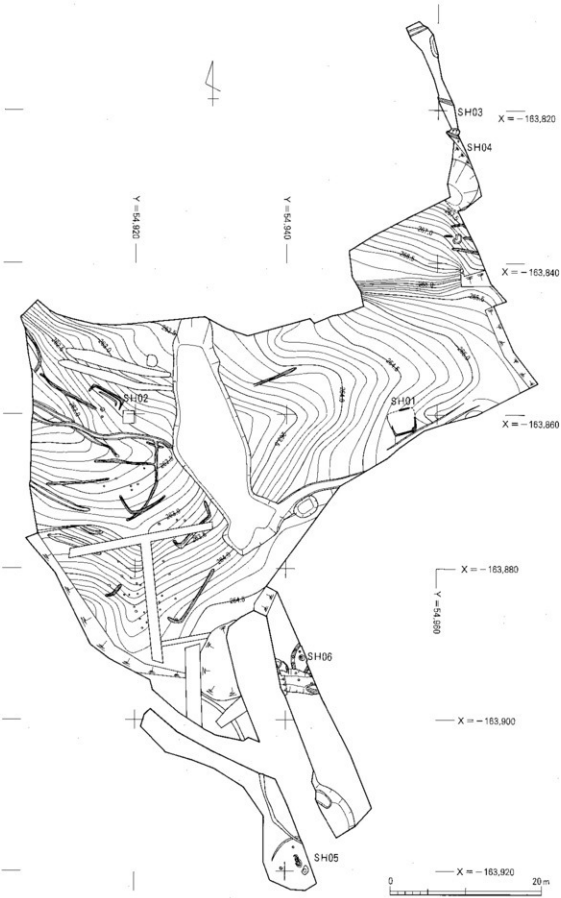
調査の結果　調査区は、谷部分と丘陵部分に大別される。谷部における基本土層は、上から順に、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：褐灰色極細砂、Ⅲ層：黒褐色シルト質極細砂、Ⅳ層：黒褐色極細砂質シルト、Ⅴ層：地山である。一方、丘陵部分では表土の直下が地山である。Ⅲ・Ⅳ層上面は土壌化しているため、弥生時代後期当時の生活面と考えられるが、遺構の検出が困難であったため、Ⅴ層上面を検出面とした。検出した遺構には、竪穴住居６棟、溝21条、土坑７基、柱穴多数がある。

竪穴住居は丘陵上に位置するもの（ＳＨ０３～０６）と丘陵裾部に営まれたもの（ＳＨ０１・０２）とに分けられ、平面形が円形のもの（ＳＨ０５・０６）は丘陵上にしか認められなかった。これらの竪穴住居は多様な構造をもっている。ＳＨ０１・０２は主柱穴をもたない方形住居であり、ＳＨ０５は、床面中央の円形の中央土坑と、その北西方向に近接する長楕円形の土坑を備える点が注意される。中央土坑の埋土には炭が堆積しており（図版８）、長楕円形土坑の埋土には炭・焼土は認められない。また、ＳＨ０６では周壁溝内を等間隔に巡る杭らしき痕跡が確認できた。

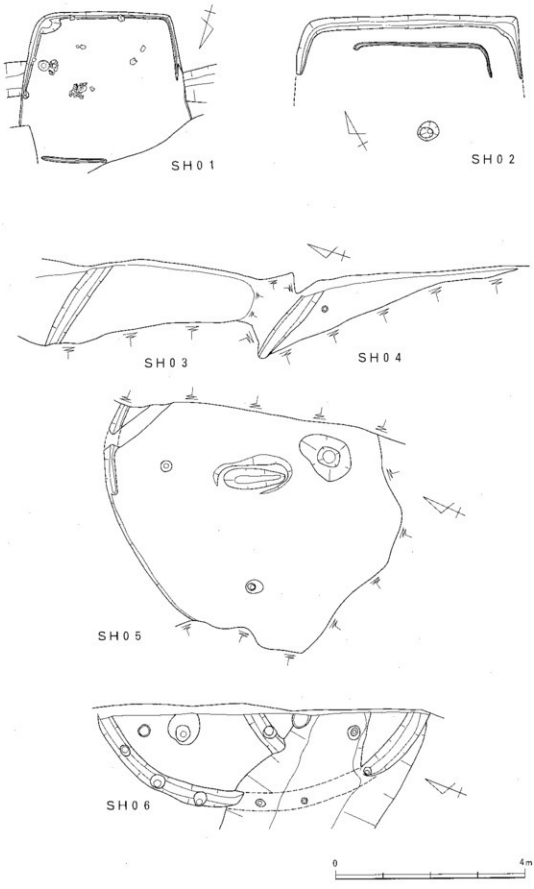
溝は谷部に多く、土坑は竪穴住居に近接して検出されたものが多いが、ともに具体的な機能については不明である。また、柱穴は多数検出されたが、建物として復元されるものはない。

遺物は、谷部のⅡ～Ⅳ層および遺構埋土から出土しており、28ℓコンテナに114箱の出土をみた。大部分は土器であり、鉄器・石製品も数点出土している。今回図示したのは、竪穴住居（ＳＨ０１～０５）の埋土から出土した比較的一括性の高い土器と、包含層出土の鉄器である。

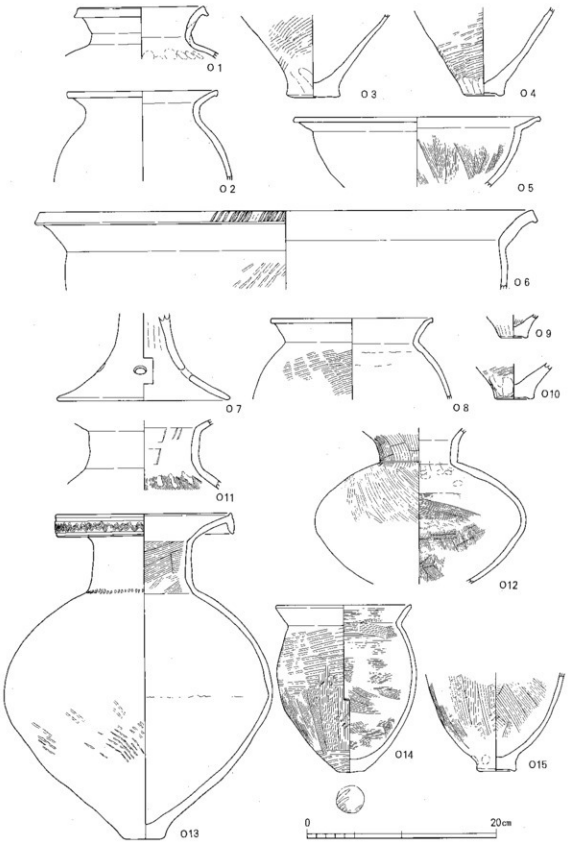
土器のなかには、櫛描波状紋を巡らせる弥生時代中期の壺の小片（Ｏ24）が含まれるが、大半は弥生時代後期に属するものである。器種には広口壺、甕、大小の鉢、有孔鉢、高坏などがあり、器台を欠く。壺や甕の内面の調整には、ハケが多用される。甕のなかには、口縁タタキ出し手法や、タタキ平底手法が認められることから、後期後半に位置づけられる。底部の形状や口縁端部の仕上げ方などからみて、久野々遺跡を遡る時期のものであり、後期後半のなかでも前葉に属するものと推定できる。個々の竪穴住居の先後関係については、細かな比較のできる材料が揃っていないため、不明とせざるをえない。



第５図　おぎわら遺跡全体図

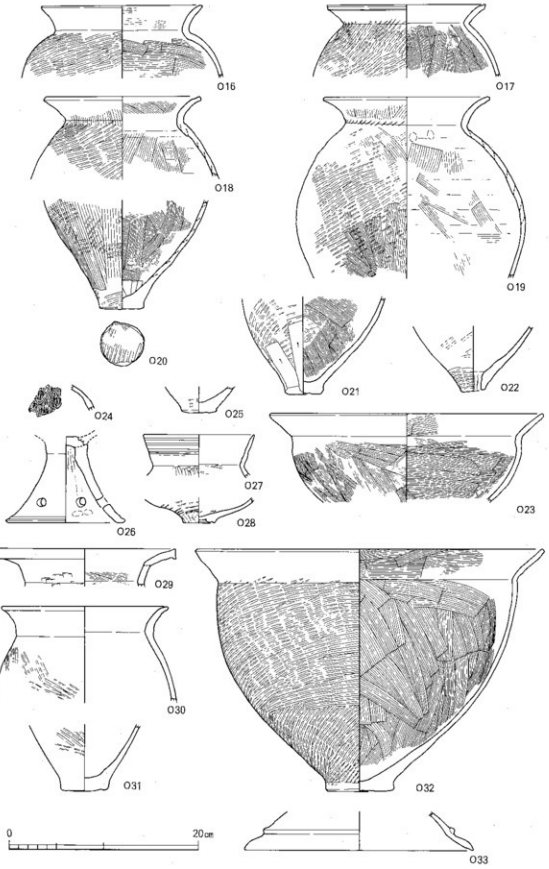


第6図　おぎわら遺跡竪穴住居



SH01：O1～O7／SH02：O8～O10／SH03：O11～O15

第7図　おぎわら遺跡出土土器（1）



SH03：O16～O23／SH04：O24～O26／SH05：O27～O33

第８図　おぎわら遺跡出土土器（２）

第４節　久野々遺跡第１次調査（第９～13図，図版９・32～34）

（１）調査に至る経緯

久野々遺跡は、平成元年、北淡町教育委員会によって実施された分布調査により発見された遺跡である。

分布調査は、仁井地区で計画された県営ほ場整備事業久野々工区全域を対象とし、当時兵庫県立洲本高校教諭で淡路考古学研究会会長であった波毛康宏氏らによって行われた。その結果、弥生時代を中心とする遺物が事業対象地域で広範囲に散布していることが確認された。周辺には、雨堤遺跡や金坪遺跡、おぎわら遺跡といった弥生時代後期の集落跡の存在が従前より確認されており、今回の調査対象地域についてもその種の遺跡の存在が予測された。

確認調査は、この分布調査の結果を受けて、平成元年度から平成２年度の２ケ年にわたり実施した。

（２）調査の概要

調査は、２×２ｍの坪掘りの手法により実施し、必要に応じ調査区の拡張あるいは追加を行った。当初、単年度の予定で調査を開始したが、平成元年度の調査の結果、遺跡の範囲は当初予想していた規模をはるかに上回る範囲に広がることが明らかとなり、その範囲を把握する必要から平成２年度についても調査を行うこととなった。その結果、平成元年度35箇所、160㎡、平成２年度52箇所、231㎡の調査となった。

遺　構

平成元年度の調査では、№１～７、№10、№13、№15の調査区10箇所で弥生時代後期の遺構や遺物包含層の存在が確認された。検出された遺構には竪穴住居址２棟、段状遺構１基、ピット等がある。

№１調査区で検出された竪穴住居址は、南にひかえる山地より派生した南北に延びるなだらかな丘陵の先端近くの東側傾斜面に位置する。調査区が２×４ｍのトレンチであるため全体の規模は不明であるが、検出された形状より円形プランの竪穴住居と考えられる。深さは40㎝を測り、壁際には幅15㎝の壁溝が確認されている。柱穴は壁面から110㎝ 離れた床面のトレンチ北壁際で１基が検出されており、深さは45㎝を測る。本住居址から出土した遺物は少なく、図化できる遺物は無かった。

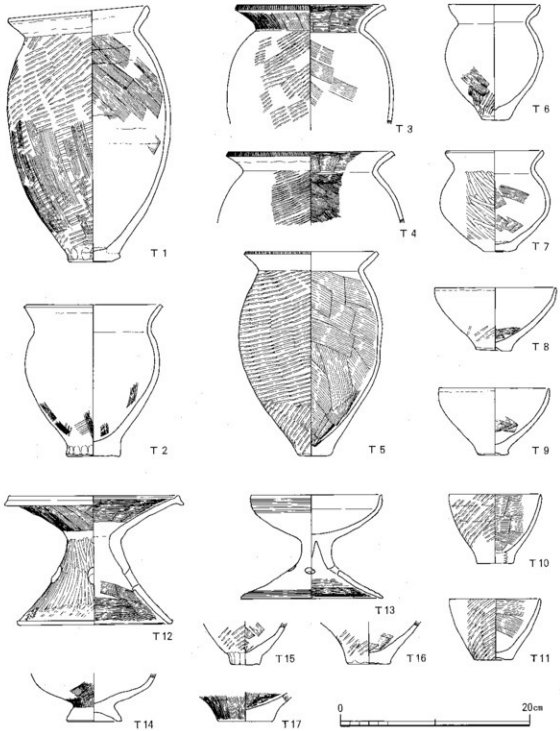
№２調査区で確認された竪穴住居址は、丘陵の西先端部に位置する。本調査区は、南北方向に長辺をもつ２×４ｍのトレンチであるが、住居址は北東隅で検出された。検出された範囲では、方形あるいは隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居と考えられ、今回はその南西隅の一角が検出されている。深さは50㎝を測り、壁際には幅15㎝の壁溝が確認されている。なお、この住居址は、二次調査でＳＨ－０１として全容が調査されている。

№15調査区は、南の山地より派生した尾根の先端に位置し、標高295ｍ、前述の住居址が検出された地点との比高差32ｍを測る。したがって、本地点からの眺望は良好で、播磨灘から瀬戸内あるいは播磨地域が一望できる。調査区は、最大幅４～５ｍ、下段の水田との比高差５ｍという急斜面に設けられた小さな段状水田に設定されている。本調査区では、ほぼ南北方向に延びる段状遺構と考えられる遺構が検出された。本遺構は、調査区を拡張したもののさらに調査区外へ広がっているため、全長など規模は確認できていない。壁の高さは、水田造営の際に削平を受けていることが予想されるが、残存高で25㎝を測る。床面には深さ38㎝を測るピット、壁際の一部では幅15㎝の溝が検出されている。本遺構の床面

では、甕、鉢、高杯、器台など、完形に復元し得る遺物を含む17個体の土器が出土している。

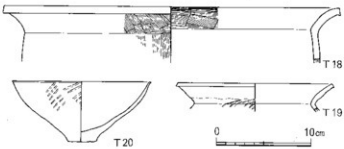
また、No.10調査区では弥生時代の遺物包含層が確認され、直下の遺構面上で石器1点が出土している。本調査区については、遺構面が平坦に整形された地山面で構成されている点や遺物包含層の堆積状況などから、竪穴住居址内に設定されている可能性が強く、遺物包含層もその埋土である可能性が考えられる。

平成2年度の調査では、元年度に弥生時代後期の集落址が確認された丘陵部を中心に、その周辺部へ



第9図　No.15調査区　段状遺構出土土器

も調査範囲を拡大し、集落の広がりの把握に努めた。その結果、No.8、9の丘陵西斜面及びNa11、12、14の5箇所の調査区で弥生時代の遺物包含層が確認されたほか、Na12、Na17～25の丘陵の一部あるいは周辺で新たに中世の遺物包含層の存在が認められるなど、中近世の遺跡の存在も明らかとなった。



第10図　No.2調査区　竪穴住居址出土土器

このうち、No.8調査区では弥生時代の遺物包含層が確認され、壷、甕、高杯、鉢など多量の弥生時代後期の上器が出土しているほか、No.12調査区でも同時代の遺物包含層が確認された。

また、No.17～20及びNo.22～25の2地点では中～近世の遺物包含層の存在が確認され、ピットなどの遺構が検出されている。

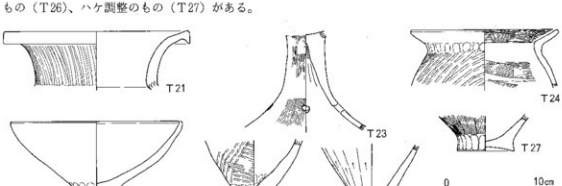
遺　物

確認調査で出土した遺物には弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、石器などがあるが、大半を弥生土器が占めている。出土した弥生土器の全てが後期に属するものである。

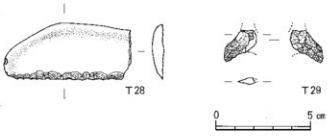
その内、No.15調査区の段状遺構出土遺物は、壷の資料を欠くものの甕、鉢、高杯、器台などが出土しており、良好な一括資料といえる。甕には中型の甕と小型の甕がある。中型の甕には、頸部が強くすぼまり、最大径を胴部にもつタイプ（T1、T3～T5）と頸部のすぼまりが弱く最大径を口縁部にもつタイプ（T2）の2種類が認められる。また、鉢はいづれも小型のものであるが、鉢にも、底部からの開きが大きく、内湾気味に立ち上がる体部をもつタイプ（T8～T9）と直線気味に急角度な立ち上がりの体部をもち、口径の小さいタイプ（T10～T11）の2種類が認められる。前者の体部外面はタタキ成形後ナデ調整で仕上げられ、内面についてもナデ主体の調整であるのに対し、後者は外面にはタタキが残り、内面は横方向のハケ調整が施される。高杯は大きく開く低い脚部に浅い椀形の杯部が付くものが1点出土している。更に、台付鉢或いは台付壷のものと考えられる脚部（T14）なども出土している。

No.2調査区で検出された竪穴住居址からは、大型の甕あるいは鉢（T18）、甕の口縁部（T19）、小型の鉢（T20）が出土しているが、いずれも床面から遊離した遺物である。

No.8調査区の包含層出土遺物には、広口壷（T21）、甕（T24）、鉢（T22）、高杯脚部（T23）、底部などが出土している。甕とみられる底部には体部外面がタタキのもの（T25）、ヘラケズリが施されるもの（T26）、ハケ調整のもの（T27）がある。



第11図　No.8調査区　包含層出土土器

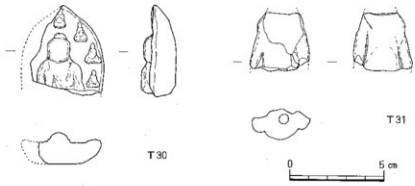


第12図　出土石器

また、№10調査区では結晶片岩砥を石材とした石器（T28）1点が出土している。幅3.0cmの棒状の石材を用い、縦方向に剥離した厚さ0.6cmの一片を使用している。この一次剥離は、人為的に加工を加えたものか、自然に剥離した石材が使用されたものかは不明である。石器の一端は折損しており、残存する全長は6.7cmを測る。背面は自然面、腹面は剥離面が未加工の状態で残されており、背面の一側縁に刃部加工が施されている。刃部の全長は6.1cmを測る。また、№12調査区では、中世のピット内からサヌカイト製の石鏃（T29）1点が出土している。先端部及び基部の一端が欠損しており全容は不明であるが、基部が大きく抉れる凹基無茎の石鏃とみられる。

中世以降の遺物としては、須恵器、土師器、瓦器などがあるが、いずれも細片化したものばかりで図化し得るものは数少ない。その内、№21と№23調査区では中～近世のものとみられる土人形が各々1点出土している。

№23調査区出土のもの（T30）は、全長4.7cm、幅3.9cm、厚さ1.8cmの小型の仏像で、左及び下部が欠損しているため本来の大きさは不明である。背面が亀甲状を呈する光背をかたどった粘土板の中央に大型の像を1体、その周囲に小型の座像が配される。仏像については、大型、小型ともに粗雑な作りであり、顔などは観察できない。光背を形作る粘土板と仏像との境に接合面などは看取されないため、型作りにより製作されている可能性が強い。また№21調査区出土のもの、（T31）は、全長3.0cm、幅3.2cm、厚さ1.6cmで上下を欠損している。底部には直径0.5cmの小さな穴があけられている。



第13図　土人形

（3）小結

確認調査の結果、南北に延びるなだらかな丘陵部を中心に広範囲に弥生時代後期及び中近世の集落址が広がることが明らかとなった。弥生時代の遺跡の範囲については、今回の調査対象範囲のさらに南に位置する急峻な山林部でも弥生土器の出土することが北淡町立歴史民俗資料館館長の富永孝氏などの調査により確認されていることから、その山林部でも弥生時代後期の集落址が存在する可能性が強く、注意を要するものである。また、土人形については、伴出した遺物が少なく時期の決定には困難を伴うが、おおむね中世後半から近世頃のものと考えられ、当時の民間信仰を反映した遺物といえよう。

砥石材については植松剛氏（兵庫県地学会顧問）のご教示による。

第５節　久野々遺跡第２次調査（第14・15図、図版10・35）

調査の概要

平成元年度～平成２年度にかけておこなわれた確認調査の結果を受けて、平成７年度～平成８年度にかけて全面調査を行うことになり、平成７年度にはそのうちの約1200㎡の全面調査を行った。さらに、事業との調整をはかるための確認調査を再度行った。

平成７年度の全面調査区は遺跡の広がる台地北西部の緩斜面に位置する。調査は現況の水田の耕土・床土及び現況の水田を区画した際の盛土を重機にて掘削し、その後人力により地山面までを掘削し、遺構の検出・掘削を行った。

基本層序は第１層・耕土、第２層旧耕土、第３層盛土、第４層灰茶色砂質土層、第５層茶褐色粘質土層、第６層黄茶色粘土層（地山層）であり、遺構面は第６層上面において形成されている。水田を形成する際に遺物包含層である第４・５層及び遺構面を形成する第６層まで削平されている部分があり、第３層の盛土内には多くの遺物が含まれていた。なお、第４層には中世の遺物が含まれていたが、この調査では中世の遺構は検出できなかった。第６層上面は弥生時代後期の遺構面である。

遺構

この全面調査区で検出した遺構は竪穴住居址３棟、溝、土坑、不明遺構等であるが、注目されるのはやはり竪穴住居址３棟であろう。

ＳＨ－01は確認調査ですでに存在を確認していた竪穴住居址であり、調査区南側で検出した。ＳＨ－01の平面形状は隅丸方形を呈し、東西長約5.3m、南北長約5.3mをはかる正方形に近いプランをもつ。周壁は0.3mをはかり、周壁の内部には周壁溝がめぐっている。主柱穴は４個と考えられ、直径約0.2m、柱間距離約1.8mをはかる。また、中央部では中央土坑を検出した。この土坑は平面形状は楕円形を呈し、内面が焼成をうけていることから炉跡ではないかと考えられる。ＳＨ－01内からは多くの弥生後期後半の土器が出土しており、北東隅からは器台が据えられた状態で出土している。

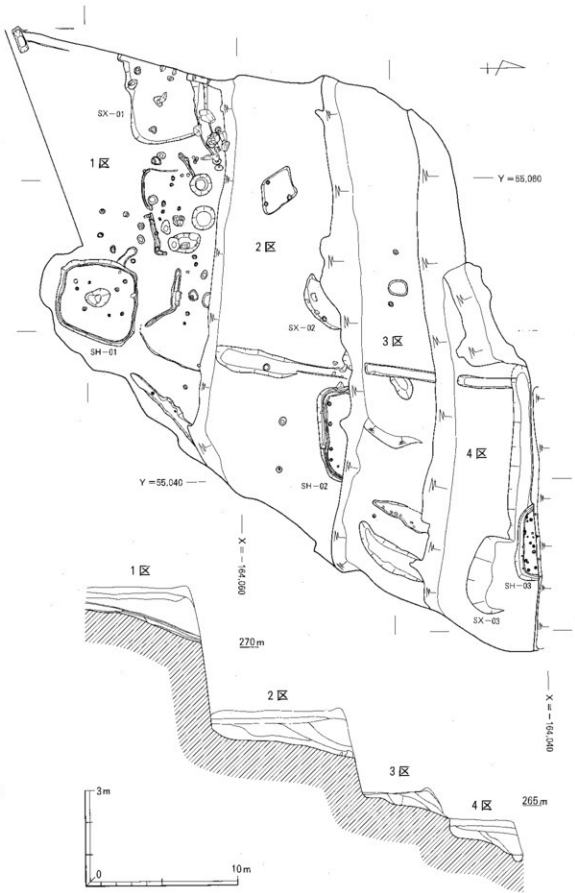
ＳＨ－02は調査区東側、ＳＨ－01より下方の緩斜面で検出した。斜面裾は流出および削平されており、約１／４残存していると考えられる。平面形状は隅丸方形と思われ、周壁の内部には周壁溝がめぐっている。周壁に沿ってピットを６個検出し、直径約0.2m、柱間距離は約1.2mをはかる。南西隅から弥生後期後半の土器が集中して出土している。

ＳＨ－03は調査区北側の緩斜面裾部で検出した。流出および削平されており、約１／５の残存と考えられる。平面形状は隅丸方形と考えられ、周壁の内部には周壁溝がめぐっている。ＳＨ－03と同じく周壁に沿ってピットを検出し、直径約0.2m、柱間距離は約0.7mをはかる。

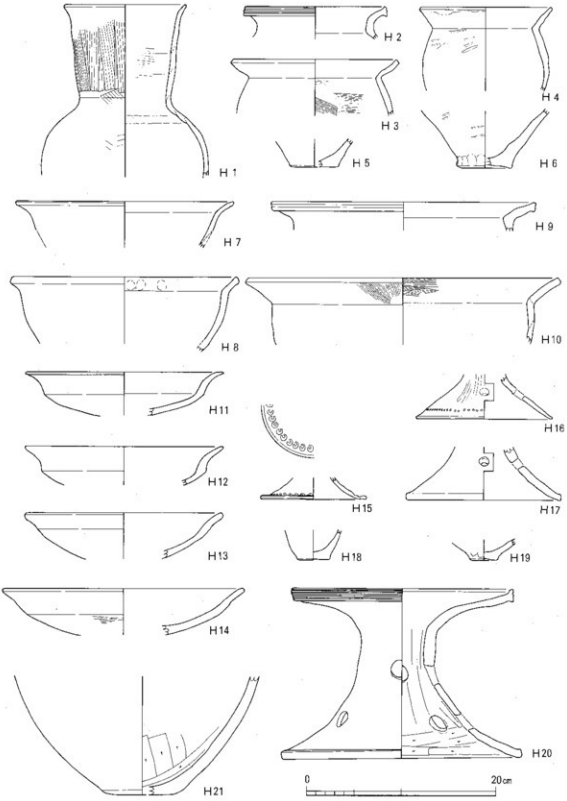
南東隅から弥生後期後半の土器が集中して出土している。段状遺構の可能性のあるものもあったが、竪穴住居址との関係は不明である。遺物の出土量は多く、そのほとんどは弥生土器である。弥生時代後期後半と考えられ、甕が多く、壺がこれに次ぐ。

遺物包含層からはサヌカイトの剥片や中世の土師器・須恵器・瓦器片が出土しているが対応する遺構は検出できていない。この調査区は遺跡の中心部と比べると傾斜も急であり、縁辺部の可能性もあると考えられていたが、居住区としてこの区域も使用されていたことがわかる。

確認調査はグリッドを９ケ所設定した。全面調査区より北側の尾根の南側斜面には弥生時代後期の遺



第14図　第２次調査全体図・土層図



第15図　ＳＨ－01出土土器

跡の広がりが確認できたが、深い谷を隔てており、おぎわらなど他の遺跡との関連も考えられる。また全面調査区と同じ台地上に設定したグリッドでは台地の頂部にいたるまで多くの遺物が出土し、遺構も検出できた。頂部に設定したグリッドでは、中世の柱穴を１個検出し、現況の集落近辺には弥生時代後期だけでなく中世の遺跡が広がる可能性がある。

平成８年度も引き続き、県営は場整備事業にともなう全面調査を行っており（第５次調査）、弥生時代後期の焼失住居をふくむ竪穴住居址２棟をはじめ、多くの遺構・遺物を検出している。現況の集落の南側において特に多くの遺構・遺物を検出しており、今後の調査結果が期待される。

ＳＨ－01出土土器（第15図 、図版39）

第２次調査で出土した遺物は弥生時代後期の土器を中心に非常に多いが、その中でも一括資料として取り扱うことのできるＳＨ－01出土の土器を掲載する。

竪穴住居址から出土した土器には壺・甕・鉢・高坏・器台がある。

Ｈ１は北淡路では類例の乏しかった長頸壺である。球形の体部上半外面には一部叩きによる成形痕が残されており、わずかにひらき気味に直立する口頸部外面は縦方向のハケによって調整している。内面は一部横方向のハケ及びナデによって仕上げている。口縁端部はナデによってわずかに外反させる。

甕には口縁端部を上下に拡張して凹線を施すものと、くの字形にひらく口縁部をもつものがある。後者の体部にはナデ或いはハケによって消されているもののタタキによる成形痕が残されている。

鉢は大型のものがみられる。指頭圧痕を残して緩やかに屈曲する口縁部をもつもの、くの字形に屈曲する口縁部をもつものがあり、後者には口縁部をハケで調整するものや口縁端部に沈線をもつものがある。

高坏は緩やかに内湾する坏部から強く外反する口縁部をもつものと、緩やかに外反する口縁部をもつものがある。内外面ともヘラミガキ或いはナデによって丁寧に仕上げている。口縁下端部に沈線をもつものがある。

脚部もヘラミガキ或いはナデによって仕上げており、四方に円形の透かしをもつ。外面下端部に列点紋や竹管紋をもつものがある。

Ｈ20は大型の器台で、四方に円形の透かしを二段に施すものである。大きくひらく口縁部の端部を上方に拡張して４条の凹線を施している。また、脚端部上面には２条の沈線が見られる。脚端部内面は横方向のヘラケズリによって調整されている。

第3章　第3次調査

第1節　調査の経緯

第3次調査は一般農道整備事業（仁井Ⅱ期地区）に伴って実施した。この事業は兵庫県洲本土地改良事務所が計画したもので、順次事業を実施してきたが、久野々遺跡周辺についても事業実施が迫ってきたため、平成7年度に一部の調査を行うこととなった。

なお、今回の調査地周辺は平成2・3年度に津名郡町村会が圃場整備事業に伴って確認調査を実施しており、尾根を中心として周辺には弥生時代後期・中世前後の遺構・遺物が出土している。このため再度確認調査を行って、遺跡の存否について問う必要がないと判断されたため、今年度該当地区について全面調査を実施した。調査は平成8年1月12日～3月15日の期間実施し、調査面積は1218㎡、調査担当者は主任山上雅弘・事務職員服部寛で行った。

調査はまず、重機掘削で耕作土、近現代盛土を除去した。この時の残土は原則として調査区の北側に横置きした。なお、周囲の水田が平成8年度に圃場整備事業を計画しているため、残土は耕作土とその他の土砂に分けて置いた。また、残土の下面にはビニールシートを敷き、水田面を損壊しないよう注意した。重機掘削終了後、人力で包含層を掘削し、遺構面を検出した。さらに、航空写真撮影や写真用足場からの写真撮影、そして遺構実測などを行い、現地調査を終了した。

調査は終了する事ができたが、今回の調査は厳冬期の調査であるうえ、高地であることや北向き斜面であるなど悪条件下での作業となった。また、積雪のため除雪作業を余儀なくされることもあり調査は困難を極めた。

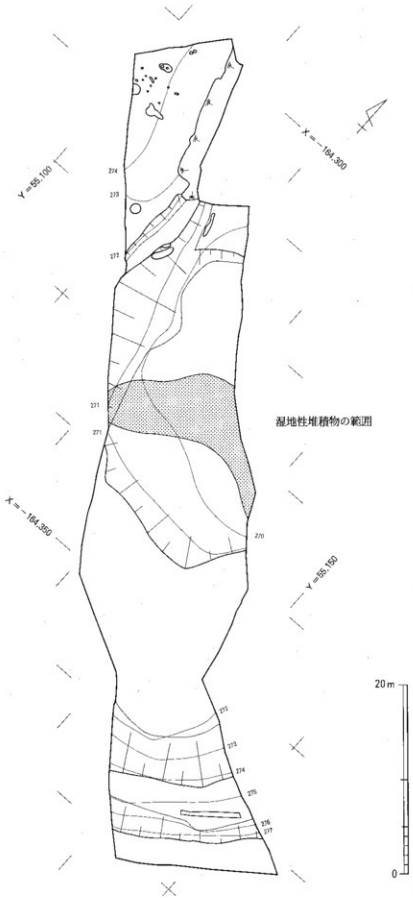
第2節　調査区周辺の地形

調査地点は久野々遺跡の東端にあたる。周辺には調査区を大きく外周しながら、常隆寺への参詣道が西から東へ登る。また、久野々地区の集落は参詣道を挟んで西側に隣接している。しかし調査区周辺は南から北に傾斜する斜面地であり、調査区は西北方向から東南方向にかけて長細い形状でほぼ長方形を呈している。また尾根上については、痩せており余り広い平坦地は調査区周辺では望めない。また今回の調査は斜面地を横切る形での調査であったため、屋敷などの検出には至っていない。

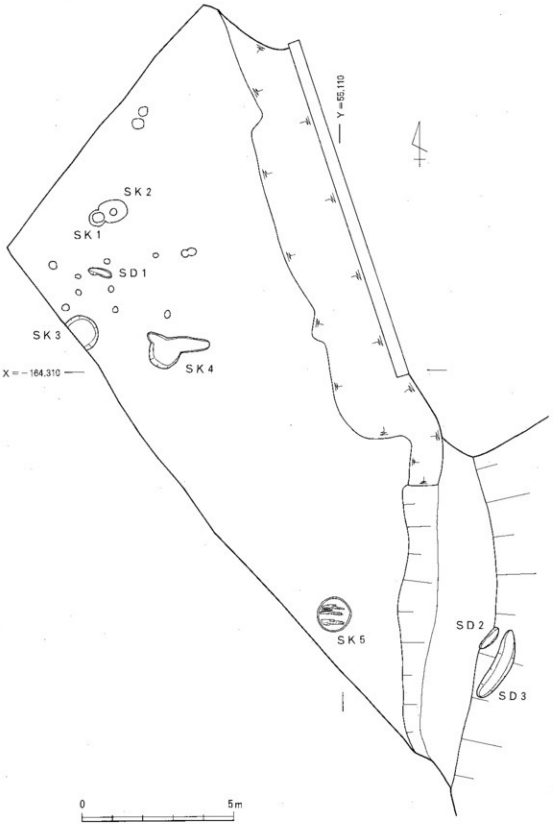
調査区周辺の微地形は両端が尾根で中央が谷にあたる起伏に富んだ調査区設定となった。尾根部と谷部の高低差は最大で8ｍを測る。調査区の両端に延びる尾根は常隆寺山（標高 515ｍ）より北に派生した尾根の支脈にあたるもので、調査区より南側、標高290ｍ付近で急激に傾斜し、谷部との高低差も大きくなる。

また、高地であることや北向き斜面であるなどの悪条件下にも関わらず、周囲には小規模な棚田が広がり、水田耕作や農閑期の野菜栽培、育牛飼育などを行っており、営農活動は盛んな地区である。

調査区の標高はそれぞれ東端地表面で約278ｍ前後（東側尾根斜面）、中央谷部地表面で272ｍ前後（調査後の谷底で270ｍ）、西端地表面で274ｍ前後である。ただし、尾根部は水田の造成時に大きくカッ



第16図　第３次調査全体図



第17図　遺構配置図

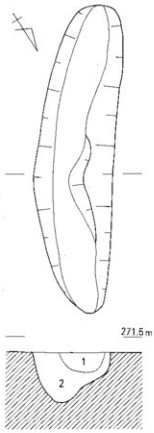
トされ、土砂を水田斜面部の盛土として利用している。このため水田斜面部には大量の盛土が行われ、部分的に包含層が存在した。更に谷部にも水田盛土や土石流などの流れ込みによって、土砂が堆積し、多くの遺物を包含している。谷部に堆積した土砂の中には直径1～2m前後の花崗岩が含まれており、谷周囲は何度か土石流に襲われていたことがわかった。さらに、谷部下層には湿地性の堆積物（オリーブ黒色シルト層）が厚く堆積し、大小の植物遺体を含んでいた。地山は花崗岩の岩盤層で、オリーブ黒色シルト層の下層に検出することができた。

第3節　遺構

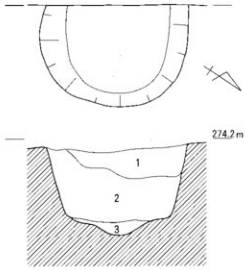
調査区西端の尾根上で、溝4条（SD1～4）、埋桶1基（SK5）、井戸1基（SK3）、土坑3基（SK1・2・4）、柱穴を検出した。いずれも中世から近世の遺構である。遺構の広がりは調査区西端の尾根上に限定され、中世から近世の集落の本体は調査区西南方向にあるようだ。

溝3（SD3）

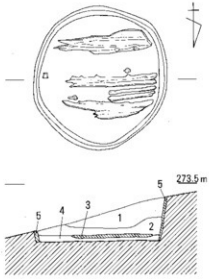
調査区西端の尾根の裾に位置し、北東方向に流れる。幅約0.6m、深さ約0.4m、残存長約2.5mを測る。断面は不整形な「U」字形をなす。図化できなかったが、土師質の埦や須恵質の甕等中世の土器の細片が出土している。



第18図　溝（SD3）



第19図　井戸（SK3）



第20図　埋桶（SK5）

井戸（ＳＫ３）

調査区西端の尾根の南西部に位置する。西半分は調査区外のため、未調査である。径約1.1ｍ、深さ約0.7ｍを測る。楕円形を呈する。遺物は出土していないが、周囲の遺構等から近世の井戸であろう。

埋桶（ＳＫ５）

調査区西端の尾根の南東斜面に位置する。径約1.1ｍ、深さ最大0.35ｍを測る。円形に地山まで掘り込んだ後、漆喰で壁を補強している。また、底部で桶の底板が残存する。近世の便所と考える。碁石（K20）の他に、ガラスの破片が出土している。近世から近年に埋められたのであろう。

第４節　遺物

Ⅲ区の遺物は、十器コンテナ２箱分と石器２点である。遺物の大半は調査区中央の谷部の包含層から出土した。遺物の供給先は、集落の本体である調査区西端の尾根上であろう。水田造成時に遺構を削平し、谷を埋めたものと考える。遺物の時期は弥生時代後期と中世から近世である。

弥生時代の土器

Ｋ１は弥生時代後期の有孔鉢の底部である。外面は右上がりのタタキが観察される。内面は強い板ナデの痕跡が確認できる。

中世前半の土器

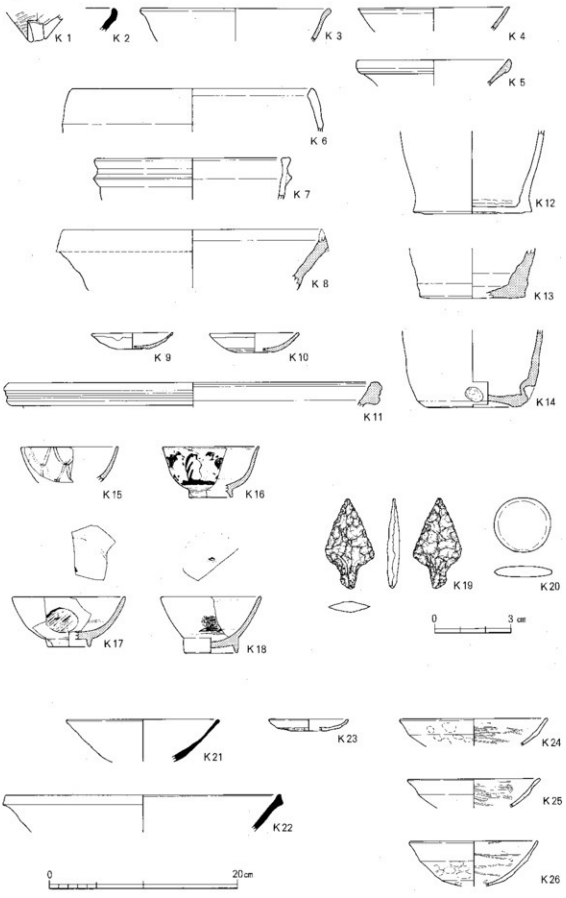
Ｋ２～Ｋ５は中世前半（13世紀）の遺物である。Ｋ２は須恵器の鉢の口縁部である。口縁端面上端をつまみあげる。Ｋ３は青磁の碗の口縁部である。Ｋ４・Ｋ５は白磁の碗である。Ｋ４は口縁部先端を外側に細くつまみ出す。灰白色を呈する。白磁碗Ⅴ類に属する[1]。Ｋ５は玉縁状の口縁部である。灰白色を呈する。白磁碗Ⅳ類に属する[1]。

中世後半の土器

Ｋ６～Ｋ８は中世後半（15世紀～16世紀）の遺物である。Ｋ６・Ｋ７は土師質の鍋である。Ｋ６の口縁部は内湾し、端部は内側へ面をなす。Ｋ７の口縁部はほぼ直立にたちあがり、端部は水平に面をなす。鐏は退化して形式的に残る固体である。外面には煤が付着する。Ｋ８は備前焼の擂鉢の口縁部である。内面は磨滅が著しく、櫛目は観察できない。備前ⅣＢ期に属する[2]。

近世の土器

Ｋ９～Ｋ18は近世の遺物である。Ｋ９・Ｋ10は施釉した灯明皿である。Ｋ９は内面に灰白色の釉を施し、外面口縁部に釉だれが見られる。また、内面にトチン痕を残す。口縁部に煤が付着する。Ｋ10も内面から外面の口縁端部まで灰白色の釉を施し、内面にトチン痕を残す。ともに幕末の遺物である。Ｋ11は擂鉢の口縁部である。玉縁状の口縁部に２条の凹線を巡らす。産地は不明である。18世紀～19世紀の遺物であろう。Ｋ12～Ｋ14は火消し壺の底部である。Ｋ12は土師質である。Ｋ13は陶器でかなり器壁は厚い。底部内面に煤が付着する。Ｋ14も陶器である。底部外面に４か所貫通しない穴を持つ。底部内面にはこげた痕跡が観察される。Ｋ15～Ｋ18は磁器の碗である。Ｋ15は外面に二重網手文を描く。Ｋ16は外面に草花を描く。Ｋ17は外面に丸文を描く。いずれも肥前系で、18世紀代の遺物である。Ｋ18も肥前系で、高台の高い「広東碗」である。幕末の遺物である。外面には山水を描く。


K 1
K 2
K 3
K 4
K 5
K 6
K 7
K 8
K 9
K 10
K 11
K 12
K 13
K 14
K 15
K 16
K 17
K 18
K 19
K 20
0
3 cm
K 21
K 22
K 23
K 24
K 25
K 26
0
20cm

第21図　出土遺物

石器

K19～K20は石器である。K19は有頭の石鏃である。長さ3.6cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmのサヌカイト製である。先端が少し欠ける。やや大型化し、弥生時代後期の遺物と考える。K20は埋桶から出土した蒜石である。径2.2cm，厚さ0.45cmで、近現代の遺物である。

採集土器

第3次調査の期間中、調査地と道路を挟んだ南西側の水田畦畔の崩落地の断面に遺物包含層を発見した（第4図）。この包含層から中世の遺物を採集した。最後に採集した中世の遺物を紹介する。

K21～K26は調査地周辺で採集した遺物である。いずれも13世紀代の遺物である。K21～K22は須恵器である。K21は碗で、口縁端部は玉縁状に小さくふくらんでやや外反する。K22は鉢である。口縁端面上端をつまみあげ、外側に面をなす。K23～K26は瓦器である。K23は皿で、暗文は確認できない。外面底部に指押さえの痕跡を残す。K24～K26は碗である。K24は内面のみ粗いヘラミガキを施す。外面に指押さえの痕を残す。K25は口縁部が横ナデにより外反する。内面のみヘラミガキを施す。K26は内面ロクロナデの後、粗いヘラミガキを施す。外面に指押さえの痕を残す。器高がやや高い個体である。

第5節　小結

久野々遺跡第3次調査の範囲では、大きく3の地区で様相を異にしていた。①東端の尾根斜面、②谷部、③西端の尾根周辺の3地区である。

①東端地区は尾根の西斜面にあたり、上方に薄く、下方に厚く包含層が認められ、中～近世の遺物を包含していた。これらの遺物の存在から水田造成の時期を考える大きな成果を得ることができた。

②谷部は何度か土石流に見舞われ、大きな地形改変を受けている。また、谷底にオリーブ黒色シルト層が厚く堆積し、多くの中世遺物を包含していた。隣接地での遺物採集の事実などを考慮すると、西側尾根部以外に上流隣接地に集落の存在が予想される。

③西端尾根上では中～近世の遺構が検出できた。水田造成による改変のため残存状況は悪いが、これらの遺構は集落に伴うものであることは疑いがない。この尾根の東側斜面では包含層も認められ、久野々遺跡の中世集落の一様態を示しており、貴重な成果となった。

〔註〕

(1) 森田勉・横田賢次郎　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4　1978

(2) 同上

(3) 間壁忠彦・間壁葭子　「備前焼研究ノート」（1）～（4）『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18　1966・1966・1968・1984

第4章　第4次調査

第4次調査は平成8年5月から8月にかけて実施した。発掘調査はⅠ区の全面調査およびⅡ区・Ⅳ区の確認調査に分けられ、遺跡の東端にあたるⅣ区では顕著な遺構・遺物とも検出できなかったが、Ⅱ区において弥生時代後期の土器を含む遺物包含層を検出したため、引き続いて全面調査を実施した。

第1節　Ⅰ区の調査概要

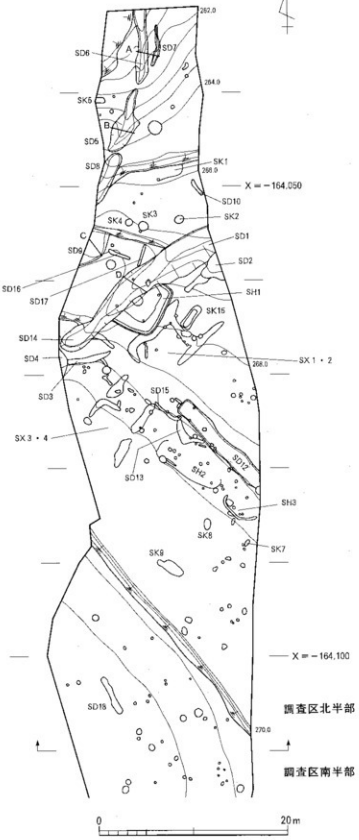
Ⅰ区は、北側に傾斜する尾根上に立地する久野々遺跡をほぼ南北に細長く縦断した範囲であり、調査区北の西隣りの地点は、北淡町教育委員会によって平成7年度に発掘調査が実施されている。この調査（久野々遺跡第2次調査）では、竪穴住居址などが検出されている。また、調査区北端の東西方向に走る谷地形を挟んだ対岸には、平成元年度に調査を実施し、弥生時代後期の竪穴住居址6棟、溝、土壙等を検出した、おぎわら遺跡が所在する。

調査地は現在、棚田状に開発されており、調査区北端では標高約260m、調査区南端では標高約275mを測り、およそ15mの比高差がある。調査区南端の丘陵上からは、西は播磨灘を挟んで東播磨地域が眺望することができ、東は大阪湾を望むことができる。棚田は、調査区西壁の土層断面の観察の結果、傾斜地上方を掘削し、下方を盛り上げることによって各々整地しており、溝や暗渠を伴う江戸時代後期以降に行われたものと考えられる。

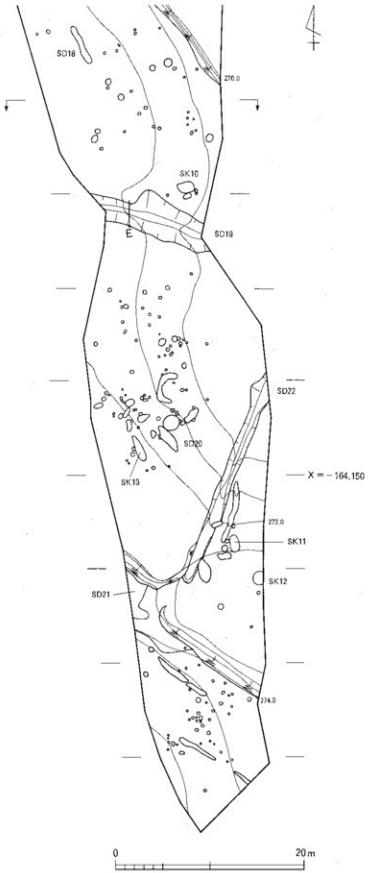
調査は、調査区内にかかる10枚の棚田について実施した。調査区内には、落ち込みや溝による棚田の痕跡が残っており、調査区は中央部付近の落ち込みによって、南半部（第22・23図）と北半部（第25図）に分けることができる。遺構は、調査区全域で土坑（ＳＫ）、溝（ＳＤ）、柱穴（Ｐ）等を検出しており、中世以降の遺構も存在しているものと考えられる。このうち、遺物により年代が確定できる遺構は、調査区北半部で確認された弥生時代後期のものである。

調査区南半部（第22・23図）は、4枚の棚田にかかる範囲である。最南端の1枚目では棚田に平行な溝2条、柱穴数ヶ所が検出されたが、これらの柱穴より建物跡を復元することはできなかった。溝21の北は棚田開発により落ち込んでいるが、それより以北は、調査区の北半部まで比較的緩やかに傾斜していく。この緩傾斜地点は、標高約273mから約272mを測り、溝22・19の2条の溝によって3枚の棚田に区切られている。溝22以東では、土坑11・12が検出され、以西では、土坑13や溝20、柱穴が検出された。また、溝19以南の4枚目の棚田でも、土坑10や溝18、柱穴が検出されたが、ここでもそれら多数の柱穴からは、いずれも建物跡を復元することはできなかった。

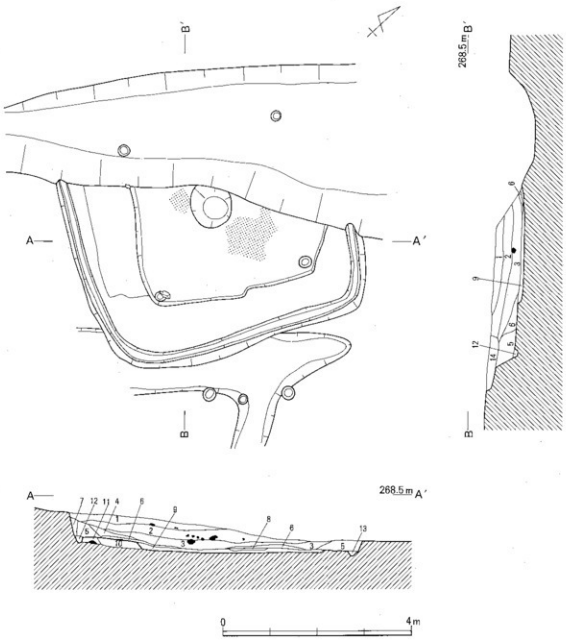
弥生時代後期の遺構が検出された調査区北半部（第22図）は、南から続く尾根上の平坦地から北側へ落ちる傾斜変換点付近にあたり、竪穴住居址3棟（ＳＨ1～3）、方形周溝墓4基（ＳＸ1～4）、土坑（ＳＫ1～4、7～9、15）、溝（ＳＤ1～4、9、10、12～17）、柱穴等が検出された。これらの遺構が集中して分布する地点は、棚田による落ち込みが一部残っているが、比較的緩やかな傾斜で約270mから約268mの標高を測る。また、調査区最北端では、土坑5や斜面に直交する溝（ＳＤ8、5、6）が検出されたが、地形は北に急傾斜し標高約260mまで下がっていく。



第22図　Ⅰ区遺構配置図（北半部）

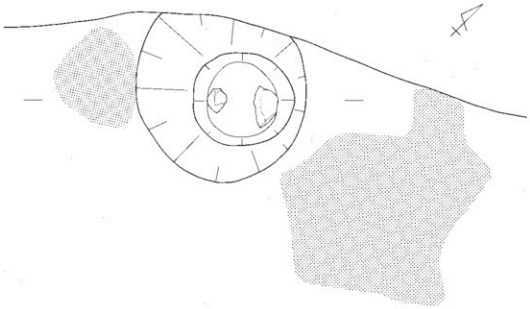


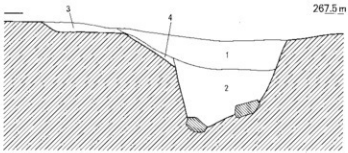
第23図　Ⅰ区遺構配置図（南半部）



1．10 Y R6／6　明黄褐色　　細砂～中砂
2．10 Y R4／4　褐色　　細砂
3．10 Y R3／3　暗褐色　　極細砂～細砂（5 ㎝～10㎝の礫を含む）
4．10 Y R4／4　褐色　　極細砂～中砂～細砂
5．10 Y R5／6　黄褐色　　細砂～中砂（壁崩落土）
6．10 Y R4／6　褐色　　極細砂～細砂
7．7.5Y R5／8　明褐色　　細砂～中砂
8．　5Y R3／6　暗赤褐色　　細砂（焼土層）
9．10 Y R5／8　黄褐色　　細砂～中砂
10．10 Y R5／8　黄褐色　　細砂
11．7.5Y R5／8　明褐色　　細砂（1 ㎝以下の小石を含む）
12．7.5Y R5／8　明褐色　　極細砂
13．10 Y R5／8　黄褐色　　細砂
14．10 Y R4／6　褐色　　細砂～中砂（周溝墓２埋土）

第24図　ＳＨ１





1．10ＹＲ4／6　褐色　　細砂
2．10ＹＲ4／4　褐色　　極細砂（炭を多く含む）
3．　5ＹＲ3／6　暗赤褐色　　細砂（焼土層）
4．7.5Ｙ Ｒ2／1　黒色　　極細砂（炭層）

第25図　ＳＨ１中央土坑

第２節　Ｉ区の遺構

竪穴住居址１（ＳＨ１）

竪穴住居址１は、調査区北半部の弥生時代の遺構が集中する標高約268ｍの地点に立地しており、棚田開発にともなう近世の溝１により遺構のおよそ北半分が、また、南に位置する方形周溝墓２によって南東壁および、南角部の一部上方が削平されていた。しかし、深さ約0.7ｍが残存している南西壁および、約0.3ｍが残存している東角部より一辺約5.8ｍの隅丸方形を呈する住居址であると判明した。住居址内には、４本の主柱穴と中央土坑、周壁溝が検出され、柱穴の外側は一段高い屋内高床部となっている。

4本の主柱穴のうち、北および、東の2本の柱穴は、住居址を削平している溝1の底面より確認され、北柱穴は直径約0.26m、深さ約0.45m、東柱穴は直径約0.22m、深さ約0.21mがそれぞれ残存している。また、南柱穴は直径約0.22m、深さ約0.49m、東柱穴は、直径約0.26m、深さ約0.39mを測る。柱穴間の長さは、4辺ともおよそ3.2mと均一である。

中央土坑は、一部削平をうけているが、直径約0.9mと直径約0.5mの円形の2段になっており、深さは約0.5mを測る。土坑内には、焼土、炭が含まれているが、壁や底には火をうけた痕跡は認められなかった。しかし、土坑周囲の床面には、広い範囲にわたって焼土が分布していた。

周壁溝は、検出した床面すべてにおいて確認されていることから、全周するものと考えられる。深さは遺存状況のよい所で約0.06mを測り、約0.24mの均一の幅をもって巡っている。この周溝内からは、出土遺物がみられないことから、排水溝としての機能よりは、壁体保護に伴う溝の可能性が高いと考えられる。また、住居址を削平している溝1以北より溝16・17の2条の溝が検出され、住居址にともなう排水溝と考えられたが、住居址床面とは約0.2mの高低差があるため、住居址とは関係ないものと判断される。

柱穴外側の一段高い屋内高床部は、南西周壁溝と南、西2本の柱穴のあいだでは盛土によって段差をつけているが、その他の部分、南角部から南東周壁、東角部においては、柱穴内側の地山を掘り込むことにより高低差をつけている。床面との比高差は0.03～0.07mである。

遺物は、埋土中より甕、壺等が、中央土坑から器台が出土した。しかし、いずれも口縁部、底部の一部の破片を残すのみである。

竪穴住居址2（SH2）

竪穴住居址2は、標高約270mの地点に立地し、確認調査（第1次調査）では段状遺構として認められていたものである。調査の結果、段の下部に沿って一部、周壁溝が確認されたことから住居址と判断した。しかし、南周壁および、東・西角部を残し、斜面下部の大半が削平されているため、中央土坑は認められなかった。

住居址の規模は、東西約7.6mを測り、周壁は遺存状況のよい所で深さ約0.21mを残すのみである。平面形は、残存している周壁の角部より判断すると住居址1と同様、隅丸方形を呈するものと考えられる。柱穴は、住居址内および、外側から数ヶ所検出されており、直径約0.26m～0.34m、深さ約0.1m～0.26mを測る。しかし、これらは、削平された部分の状況が不明であるため、いずれが主柱穴あるいは、支柱穴との判断は困難である。

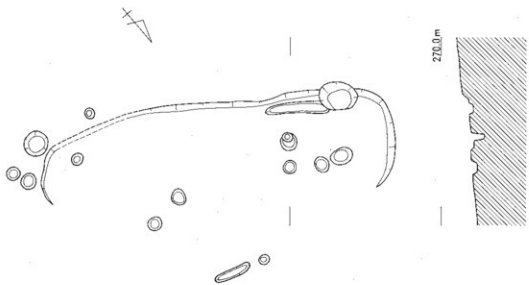
土器は、甕、壺、器台等が埋土中より出土している。

竪穴住居址3（SH3）

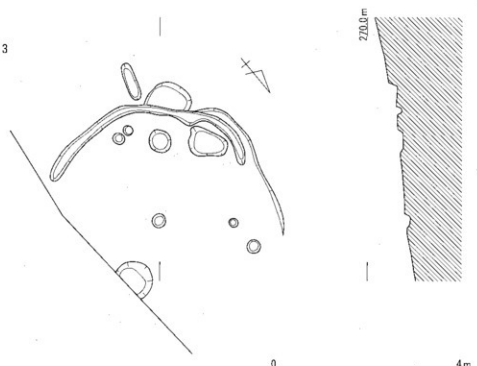
竪穴住居址3は、竪穴住居址2の東、調査区東壁際より検出され、標高約270mの地点に立地している。北側（下部）は削平されているが、直径約5mを測る小型の円形住居址である。周壁の残りは非常に浅く、最も深い所で0.19mを測る。この周壁に沿って幅約0.2m、深さ約0.05mの周壁溝が巡っている。柱穴は、直径約0.48m、深さ約0.05mと直径約0.28m、深さ約0.11mの2本の主柱穴が確認され、柱間はおよそ1.7mを測る。床面には、中央土坑あるいは、焼土等は認められなかった。

遺物は、図化できるものはなかったが、甕、壺等の破片が出土した。

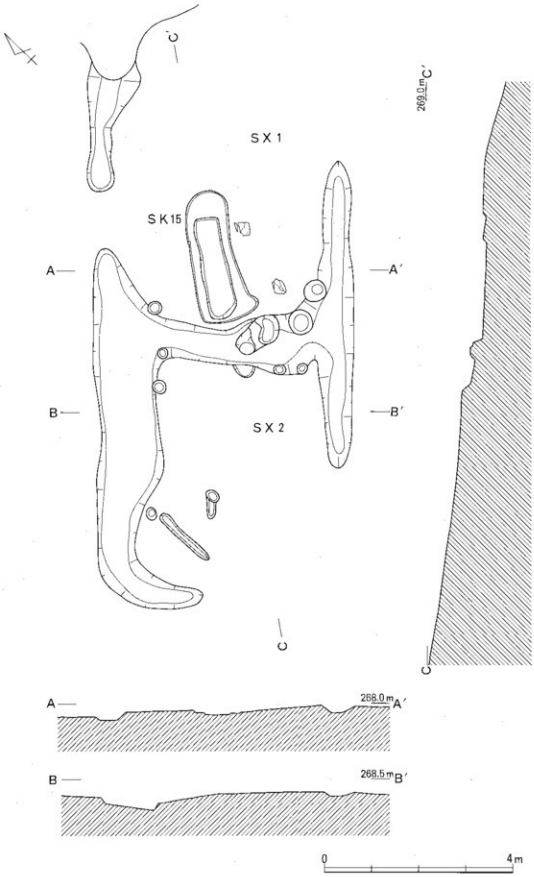
SH2



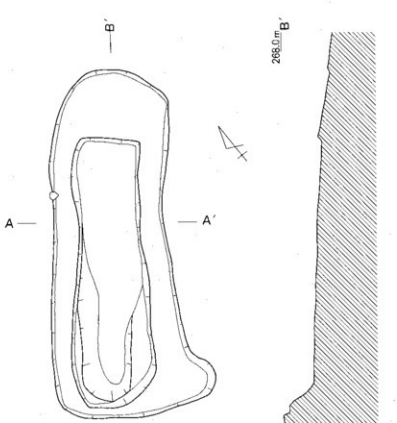
SH3



第26図　SH2・3



第27図　SX1・2



1．10ＹＲ3／3　暗褐色　極細砂～細砂（土器出土）
2．10ＹＲ4／4　褐色　細砂
3．10ＹＲ5／8　黄褐色　細砂～中砂
4．10ＹＲ4／6　褐色　細砂

第28図　ＳＸ１内ＳＫ１５

方形周溝墓１（ＳＸ１）・主体部（ＳＫ15）

今回の調査では、調査区北半部より４基の方形周溝墓が確認された。遺構は北側になだらかに傾斜する地形をそのまま利用して構築されており、４基は溝を一部共有しながら、北東方向から北西方向にならんでいる。北端の方形周溝墓１では標高約268ｍを測り、南端の方形周溝墓４では標高約270ｍを測る。

このうち、方形周溝墓１は、方形周溝墓２の北東溝と一部共有し、北東溝を除く３方向の溝が検出された。北西溝は、残存長約5.5ｍ、幅約0.5ｍ、深さ約0.2ｍを測るが、途中途切れており、陸橋状を呈しているようにみえる。南西溝は、長さは約5.6ｍ、幅約0.8ｍ、深さ約0.1ｍを測り、南東溝へと角度をかえて続いていくが、溝の底は一定ではなく数カ所に柱穴や土坑状の落ち込みが検出された。

周溝の内側は、地山内の石が検出されるほど削平されていたが、周溝内側の斜面上方寄りで方形状の土壙（ＳＫ15）を確認した。これは、長さ約2.7ｍ、幅約0.9ｍの方形内に、さらに長さ約2.1ｍ、幅約0.6ｍを測る土壙が検出されたものである。棺材の痕跡あるいは、小口の存在などが明確に認められないため、これらを埋葬施設の掘方および、木棺と判断するのは困難であるが、土層断面の堆積状況をみる限り、埋葬施設の可能性が高いと考えられる。但し、棺底の形状は、Ｕ字形あるいは、平坦と一様ではなかった。

遺物は、周溝および、土壙15から、壺のＬＩ縁部、底部等が出土している。

方形周溝墓２（ＳＸ２）

方形周溝墓２は、方形周溝墓１の南西に位置し、標高約268.5ｍの地点にある。周溝は、北東溝を方形周溝墓１と共有しており、南西溝の過半部から南角部、南東溝の一部が巡っていないが、平面形は長さ約６ｍのほぼ正方形を呈している。幅は約0.8ｍ、深さは残存状況のよい所で約0.1ｍである。北西溝と住居址１は重複しているが、北西溝の土層断面から、方形周溝墓２は竪穴住居址１が埋没した後に構築されたことが判明した。このため、調査区北半部に集中する住居址および、方形周溝墓群等の遺構は、出土した土器から弥生時代後期に属するものと考えられるが、遺構の切り合い状況から後期の中でも時期差が認められる。周溝内側は削平されており、埋葬施設は確認されなかった。

方形周溝墓３（ＳＸ３）

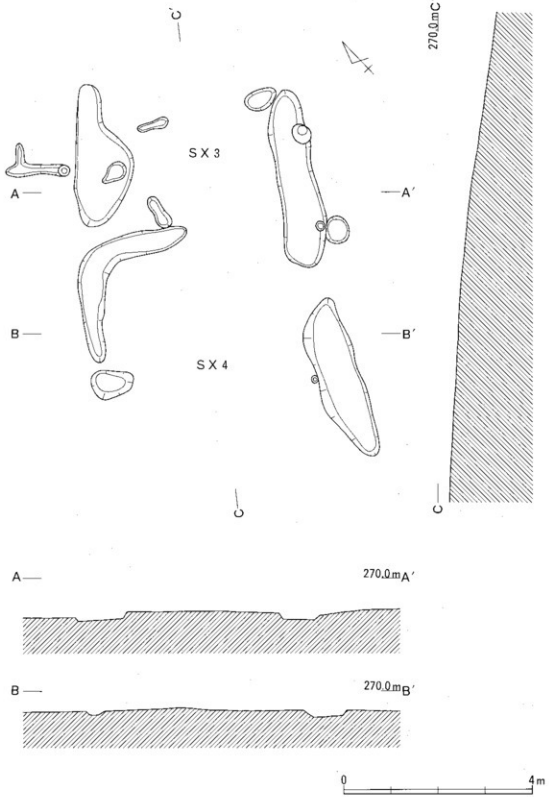
方形周溝墓３は、方形周溝墓２の南西に位置しており、標高は約270ｍを測る。周溝は、南西溝が方形周溝墓４と共有し、北角部が方形周溝墓２と一部共有している。この他、北西溝および、南東溝が検出されたが、北角部との間には約1.8ｍの空間が認められる。このため、全体の平面形は、北角部から西角部は約5.2ｍ、南西溝は約５ｍを測ることから、ほぼ正方形を呈するものと考えられる。周溝内側は削平されており、埋葬施設は確認されなかった。

方形周溝墓４（ＳＸ４）

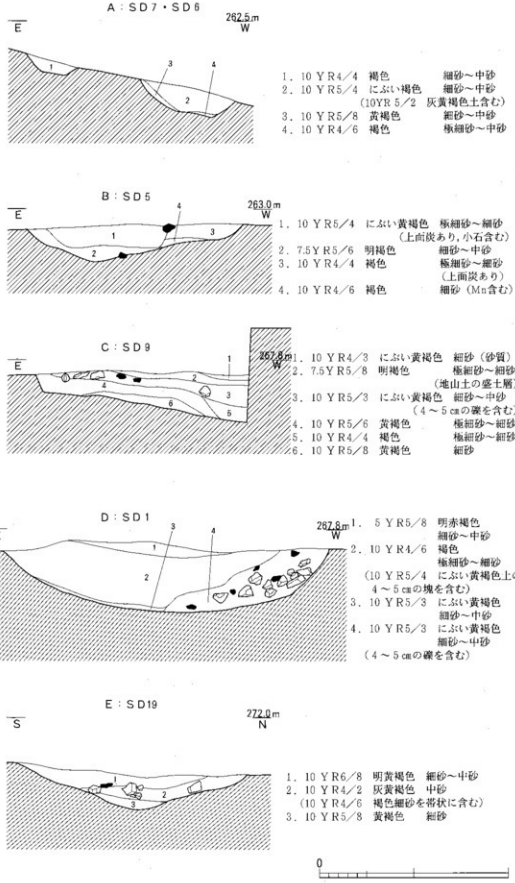
方形周溝墓４は、今回検出された方形周溝墓群のうち、最南端の標高約270ｍの地点に位置する。周溝は、一部方形周溝墓３と共有し北西溝から北角部および、北東溝と南東溝が検出されている。周溝の幅は約0.9ｍ、深さは残存状況のよい所で約0.1ｍである。全体の平面形は、方形周溝墓の南端が検出されておらず、不明であるが、一辺約5.8ｍの正方形あるいは、長軸が5.8ｍ以上の長さをもつ長方形を呈するものであると考えられる。周溝内側からは埋葬施設は確認されなかったが、周溝墓検出中に碧玉製の管玉１点が出土している。

土坑（ＳＫ１～ＳＫ15）

土坑は、調査区全域より15基検出されており、遺物が出土したものについては遺構番号を付け図示している。そのうち土壙15（方形周溝墓１主体部）については、既述しているため、その他の14基の土坑のうち、実測可能な土器が出土した土坑７および、弥生時代後期の遺構が集中する調査区北半部から検出された土坑について記述する。



第29図　SX3・4


A：SD7・SD6
E
282.5m
W
1．10YR4／4　褐色　細砂～中砂
2．10YR5／4　にぶい褐色　細砂～中砂
（10YR5／2　灰黄褐色土含む）
3．10YR5／8　黄褐色　細砂～中砂
4．10YR4／6　褐色　極細砂～中砂
B：SD5
E
263.0m
W
1．10YR5／4　にぶい黄褐色　極細砂～細砂
（上面炭あり，小石含む）
2．7.5YR5／6　明褐色　細砂～中砂
3．10YR4／4　褐色　極細砂～細砂
（上面炭あり）
4．10YR4／6　褐色　細砂（Mn含む）
C：SD9
E
267.8m
W
1．10YR4／3　にぶい黄褐色　細砂（砂質）
2．7.5YR5／8　明褐色　極細砂～細砂
（地山土の盛土層）
3．10YR5／3　にぶい黄褐色　細砂～中砂
（4～5cmの礫を含む）
4．10YR5／6　黄褐色　極細砂～細砂
5．10YR4／4　褐色　極細砂～細砂
6．10YR5／8　黄褐色　細砂
D：SD1
E
267.8m
W
1．5YR5／8　明赤褐色
細砂～中砂
2．10YR4／6　褐色
極細砂～細砂
（10YR5／4　にぶい黄褐色土の
4～5cmの塊を含む）
3．10YR5／3　にぶい黄褐色
細砂～中砂
4．10YR5／3　にぶい黄褐色
細砂～中砂
（4～5cmの礫を含む）
E：SD19
S
272.0m
N
1．10YR6／8　明黄褐色　細砂～中砂
2．10YR4／2　灰黄褐色　中砂
（10YR4／6　褐色細砂を帯状に含む）
3．10YR5／8　黄褐色　細砂
0

第30図　溝土層図

土坑1：調査区北半部の棚田による落ち込み際、比較的傾斜が緩やかな地点より検出された。北側は削平され、これより北へは急傾斜地形となっていく。東西約3.0m、南北約1.2mの長方形を呈し、深さは約0.2mを測る。この標高約 265mを測る平坦な面では、この他に溝8・10や土坑2・3・4が検出されている。

土坑2：土坑1の約4.5m南側より検出され、直径約0.9mの円形を呈し、深さ約0.3mを測る。

土坑3：土坑2の約3.0m西側より検出され、直径約1.0mの円形を呈し、深さ約0.5mを測る。

土坑4：土坑3の約1.0m西側より検出され、直径約0.8mの円形を呈し、深さ約0.3mを測る。

土坑5：調査区北端の急傾斜地形の西壁際、標高約263mの地点より検出された。西側の調査区外へと続いていくため、確認長は東西約1.0m、南北約0.6mを測り、深さは約0.2mである。

土坑7：竪穴住居址3の南側、約2.0mの地点より検出された。長軸0.8m、短軸0.3mの隅丸方形を呈し、深さは約0.2mである。遺物は、埋土中より弥生時代後期の壺の底部が出土している。

溝（SD1～SD22）

調査区全域から、弥生時代後期あるいは、中世および、近世後期の棚田開拓に伴う溝などが検出された。溝は等高線に沿ったものや、直交するもの、または棚田に伴うものなどがあるが、遺物が出土したものについては遺構番号を付け図示している。このうち、実測可能な土器および、石器が出土した溝等について、以下に記述する。

溝1：調査区北半部の弥生時代後期の遺構が集中して分布している地点で検出された。溝は竪穴住居址1の北側を削平し、調査区を横断する形で南西方向から北東方向に流れている。長さ約20m、幅約3m、深さは最大で約0.8mを測る。近世後期の棚田開発に伴う溝であるが、竪穴住居址1から流れこんだものと考えられる弥生時代後期の土器や、土師器が出土している。また、溝の中央付近、竪穴住居址1の西側では、直径約0.5mの範囲に円形状の炭の塊が検出された。

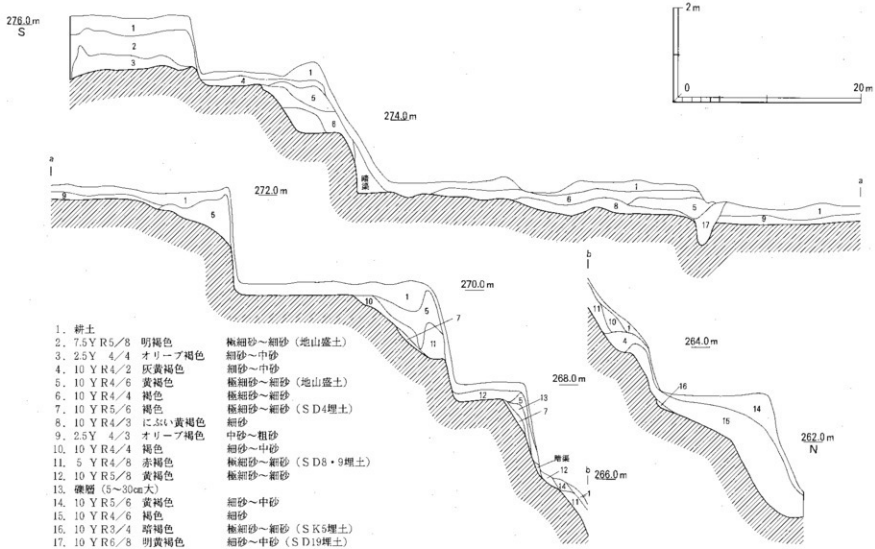
溝8：調査区北端の西壁より北方向に続く溝であるが、調査区外の南側へも続いていくものと思われる。等高線に直交し、幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。北側で検出された溝5・6とは同一の可能性が考えられ、溝6の東側には並行して、長さ約4.5m、幅約0.3m、深さ約0.2mを測る溝7も検出された。遺物は弥生土器のミニチュア壺の底部が出土しているが、周辺からの流れ込みである。

溝9：溝1の北西から検出されたが、西側は調査区外のため調査が及んでいない。また、北側は棚田開発に伴う削平により、約1mの落ち込みがあり、溝の一部を検出したに過ぎない。土器は流れ込みによる器台の脚部が出土している。

溝10：調査区北端の東壁際より、北西方向に流れている。溝1の北側、土坑1の南東に位置し、長さ約2.2m、幅約0.3m、深さ約0.3mを測る。遺物は弥生土器の甕の口縁部が出土している。

溝19：調査区南半部の緩傾斜地点より検出され、ほぼ東西方向に流れている。幅約3m、深さは最大で約0.6mを測る。溝は2枚の棚田を区切っており、調査区外の東西両側へとさらに続く。調査区西壁際では、溝の両肩に石積みが残存しており、これらの溝の石積みを利用し現在の棚田の石垣が構築されたものと考えられる。

溝20：調査区南半部の土坑13や多数の柱穴が集中して分布している地点で検出された。長さ約3.2m幅約1m、深さ約0.2mを測る。溝内より、サヌカイト製石器が出土している。



第31図　調査区西壁土層図

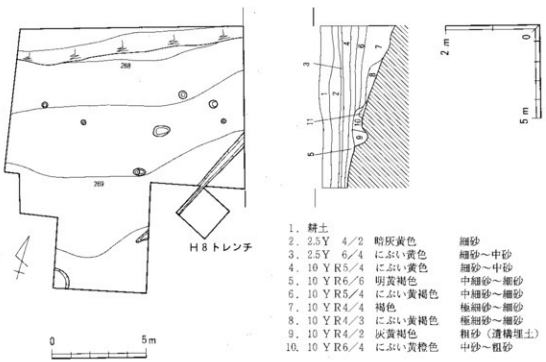
第3節　Ⅱ区の調査概要

Ⅱ区は、久野々遺跡が所在する丘陵に小さく入り込んだ谷地形にあたり、Ⅰ区の南方、Ⅲ区の北西に位置する。調査地点はⅠ区と同様、棚田状に開発されており、7枚の棚田をほぼ南北に縦断する範囲である。標高は谷部の最低位で約267mを測り、Ⅰ区から傾斜する地形を開発した北側の棚田では約272m、Ⅲ区から続く斜面上に開発された南側の棚田では約270mを測る。確認調査は、平成元年度に行われた確認調査の結果をふまえ、4ケ所にグリット（2m×2m）を設定し実施した。これにより、Ⅱ区の南端部、標高約270mの棚田において、弥生土器を含む褐色土の遺物包含層を確認したため、全面調査範囲を設定し、発掘調査を引き続き実施した。

第4節　Ⅱ区の遺構

調査の結果、南側（斜面上方）は棚田開発による削平をうけていたが、調査区のほぼ全面にわたり遺物包含層が堆積し、弥生時代後期の土器片（壺、高杯等）が出土した。また、この遺物包含層からは、石鏃や鉄器も出土している。遺構は、調査区全域において不明瞭な窪みが多く、その中で土坑および、数カ所の柱穴を検出した。しかし、これらの柱穴からは、建物跡を復元することはできず、住居址などの弥生時代の遺跡本体は斜面上方の谷頭部に存在するものと推定される。

この他、弥生時代の遺構以外に、中世に属する瓦器片を出土した溝1条を検出した。この溝は、幅約0.5m、深さ約0.2mを測り、調査区東壁より南西方向に検出されたが、調査区内で途切れている。



第32図　Ⅱ区遺構配置図・土層図

第5節　Ⅰ・Ⅱ区の遺物

今回の調査ではⅠ・Ⅱ区から弥生時代から近世にかけての土器・石器・金属器が出土している。金属器に関しては、第3次調査のⅢ区のもの、及びおぎわら遺跡のものも含めて報告する。

Ⅰ区の土器

Ⅰ区より出土した土器は、中世以降に属する遺物と弥生時代後期の遺構に伴うものとに大別できる。そのうち、図化できたもの（第33図　K27～K51）は総数25点である。

竪穴住居址1では、中央土坑より器台が1点（K33）出土した他は、大半の遺物は埋土中からの出土である。このうち、糸切り底部をもつ土師器の小皿（K35）1点を除けば、その他は弥生土器である。器種は、壺（K27・28）・甕（K29・31）・鉢状の底部を呈する土器（K30）・器台（K33・34）・不明器種（K32）である。壺は外反する口縁の端部を拡張した形態をもつもので、内面にはヘラナデが、外面にはヨコナデの調整痕が認められる。甕はともに底部のみが残存しており、一部外面にタタキによる整形痕が認められる。焼成前の穿孔がある鉢状の底部には、内面は縦方向のナデと、穿孔には横方向のナデが施されており、外面にはナデおよび、タタキによる整形痕が残っている。器台は鋸歯文が巡る口縁部と脚柱部が出土しており、ともにナデによる調整痕が認められる。

竪穴住居址2では、外反する口縁端部を拡張した壺（K36）、外面にタタキの整形痕が残る甕（K37）、内外面ともにナデによる調整痕が認められる器台（K38）などが埋土中より出土している。

方形周溝墓1では、主体部である土壙15より壺および、甕の2点（K42・43）が出土し、その他（K40・41・44）は周溝内より出土している。壺は体部から屈曲して外反する口縁の形状を呈し、内外面ともにナデによる調整が認められる。甕はともに底部のみが残存しているが、磨滅により調整は不明である。

土坑7から出土したK39は周囲にユビオサエによる痕跡が残る上げ底状の甕底部である。

溝1からは土師器の羽釜（K47）などの中・近世の遺物と伴にK45・46などの弥生土器の底部も出土している。

ミニチュア壺の底部（K48）は後世に掘削された溝8から出土しており、内外面にナデによる調整痕が残っている。

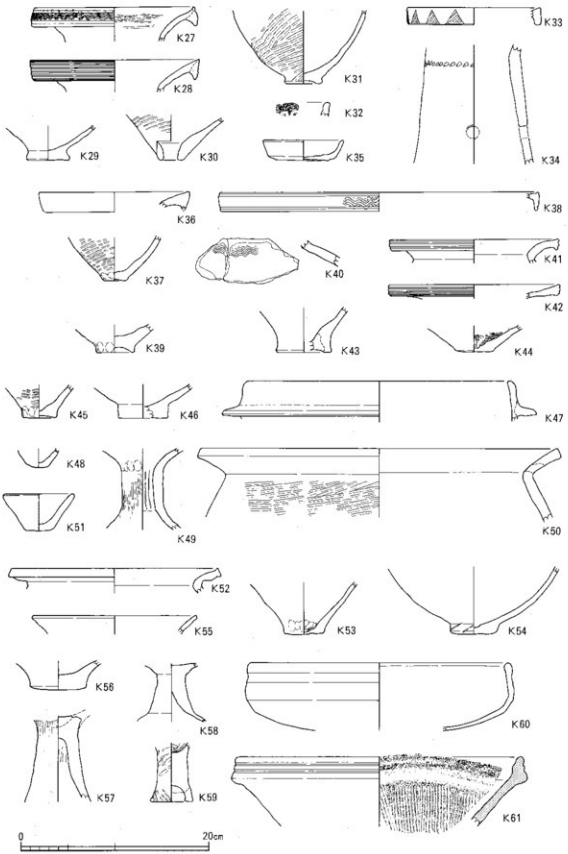
器台（K49）も後世に掘削された溝9から出土しており、比較的細い脚柱部から受け部および、裾部が「ハ」の字状に開く形状を呈するもので、内面には絞り痕、外面には細いミガキおよび、ユビオサエによる調整痕が認められる。

やはり後世に掘削された溝10から出土した甕（K50）は大型のもので、体部から「く」の字状に屈曲して開く口縁部をもち、体部上半外面にはタタキが残されている。

包含層より出土したミニチュアの鉢（K51）は、内外面ともに磨滅により調整痕は認められない。

Ⅱ区の土器

Ⅱ区の土器のほとんどは包含層より出土しており、細片が多く、そのうち図化できたものは総数8点（第33図K52～K59）である。弥生土器の壺（K52）・甕（K53・54・56）・高杯（K57・58）、土師器の甕（K55）・製塩土器（K59）が出土している。


K27
K28
K31
K32
K33
K29
K30
K35
K34
K36
K38
K37
K40
K41
K42
K39
K43
K44
K45
K46
K47
K48
K51
K49
K50
K52
K55
K53
K54
K56
K58
K60
K57
K59
K61
0
20cm

第33図　出土土器

壺は体部から屈曲して外反する口縁を呈するものであり、甕はナデあるいは、ユビオサエによる調整痕が残る底部である。高杯は脚柱部のみが残存しているが、調整は磨滅により不明である。製塩土器は、長く伸びる脚部がほぼ完全な形で残存しており、外面にはタタキによる整形痕が認められる。

Ⅱ区では全面調査を行った地区以外の確認調査で土師器の焙烙（K60）および、無釉陶器のすり鉢（K61）が出土した。ともに近世以降の整地層出土である。

石器（第34・35図 、図版35）

久野々遺跡Ⅰ区およびⅡ区では、土器の他に石器６点と碧玉製管玉１点が出土している。石器の内訳は石鏃３点（K63・64・65）・楔形石器１点（K66）・敲石１点（K67）・砥石１点（K68）である。

石鏃はサヌカイト製で、脚端部が尖るもの（K63・64）と、脚端部を平坦につくるもの（K65）の二種の基部の平面形態をもつものが認められる。脚端部が尖る平面形態をもつもののうち、土坑１より出土したK63は、全長1.44cm、幅1.18cmを測り、Ⅱ区包含層より出土したK64は、幅1.53cm、現存長1.28cm（推定長約2.4cm）を測るものである。また、脚端部が平坦な平面形態をもつK65は、Ⅰ区土坑12より出土しており、幅1.88cm、現存長2.10cm（推定長約3.1cm）を測る大型のものである。

Ⅰ区溝20より出土した楔形石器（K66）は、整形加工された痕跡が認められず、薄手の剥片素材を刃部として使用しているものと考えられる。

Ⅱ区包含層より出土した敲石（K67）は、不整三角形を呈した自然石を利用したもので、そのうち２角に敲打痕が認められるものである。

砥石（K68）は、Ⅱ区土坑２より出土した砂岩製のものであり、３面より使用痕が認められる。

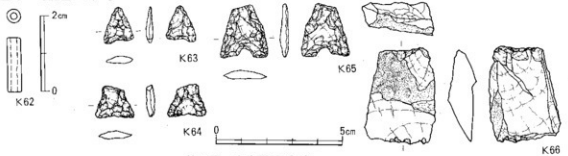
管玉（K62）は、方形周溝墓４の検出中より出土したものであり、全長1.4cm、直径0.4cm、穿孔径0.2cmを測る。２方向からの穿孔が認められ、黒色を呈する碧玉製である。

この他に機械掘削時などの上部堆積土からチャート製の火打石（図版39K75～K77）が出土している。細かい打撃によって稜が丸くなっている。

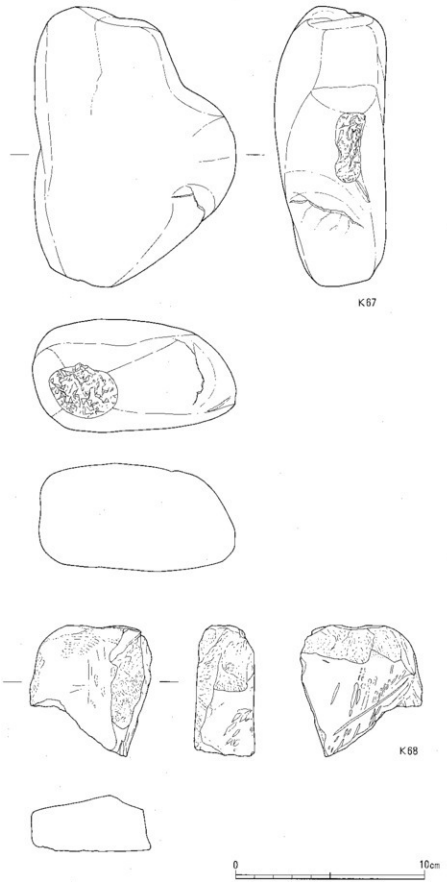
金属器　（第36図、図版39）

おぎわら遺跡および久野々遺跡から出土した金属器は16点を数える。この中で鉄器10点中８点を図化した。銅器には銭貨・煙管の吸口などがあり、一部を図版に掲載した。ほとんどが包含層からの出土であるため、共伴土器によって時期を特定することはできない。

おぎわら遺跡から出土したO16はほぼ完形のヤリガンナの身である。長さ19.4cm、幅1.3cmを測る。先端から約５cmのところから刃部の反りが始まるが、茎部と刃部の境は明確に指摘できない。O17は鎌の基部の可能性が高い。



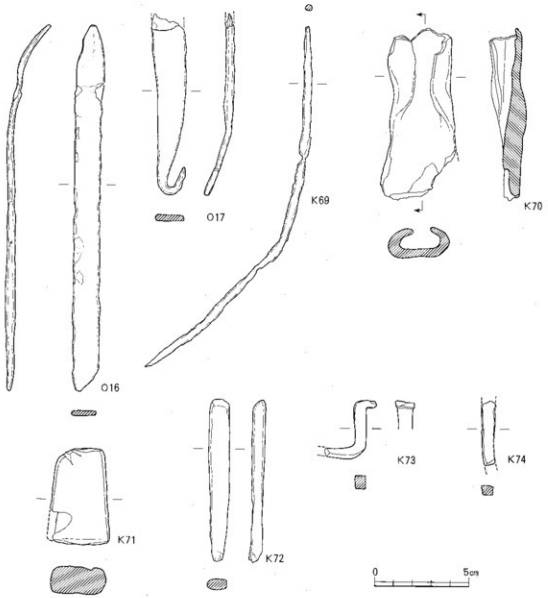
第34図　出土石器（１）



第35図　出土石器（２）

久野々遺跡から出土したK70はⅠ区地山直上から出土した刃先の開いたやや長めの袋状鉄斧である。鍛造品であり、刃部を欠失する。現存長約９㎝、刃部復元幅約4.5㎝、基部幅約3.5㎝を測る。袋部の内径は偏平である。

K69はⅢ区、K71はⅠ区整地層から出土しており、ともに近世以降のものであろう。K69は針金状を呈しており、火箸の可能性もある。K71は方柱状を呈しており、破損部分及びX線透過写真を見ると、内部が中空である可能性がある。K72・K73・K74はⅡ区整地層から出土しており、この他に鉄滓も出土している。中世以降のものであろう。K73・K74は釘である。断面形はいずれも長方形である。図版39のK78～K80は銅製の煙管の吸口で、Ⅲ区から出土したK79は一部に鍍金と思われるものが残存している。前述の火打石と同様近世のものであろう。



第36図　おぎわら遺跡・久野々遺跡出土鉄器

第5章　まとめ

数次にわたる久野々遺跡の発掘調査と近接するおぎわら遺跡の発掘調査によって、この周辺には弥生時代後期を中心とした遺跡が約10万㎡にもわたって広がっていることがわかった。中世から近世にかけての遺跡も、今回の全面調査範囲から中心がはずれるものの存在しており、13世紀代の貿易陶磁や瓦器などの資料を得た。また第1次調査で出土した土製の小仏像は常隆寺への参道に沿った集落での仏教信仰の資料として注目される。

遺跡は淡路島の北部の標高260～280mの山間部にあり、低地である西浦の海岸までは約2.5㎞、東浦の海岸までは約4.5㎞と、幅の狭い北淡路では内陸部に位置する。遺跡周辺の地形は山間部でも台地・丘陵状の比較的ゆるやかな地形を示しているものの、細かい谷や尾根が入り組んだ複雑な地形である。遺跡からの眺望は場所によって異なるが、西浦から播磨灘にかけての眺望は優れており、また一部東浦から大阪湾北岸をも見通すことができる。

弥生時代後期の集落址は後世の削平が著しく、消滅した遺構もかなりあるものと思われるが、竪穴住居・方形周溝墓・土坑などが検出されている。同時期の柱穴も存在するが、掘立柱建物を復元するには至っていない。これらの遺構は住居址と方形周溝墓の重複状況などから見て、居住域から墓域へと変化する時間幅を考慮する必要がある。

竪穴住居址はおぎわら遺跡で6棟、久野々遺跡では6棟、確認調査やその後の調査で検出されたものも含めると合計15棟以上確認されている。これらには尾根の先端部から下る斜面に立地するものや、谷斜面に立地するものがあり、尾根の頂部の平坦地からは検出されておらず、西風などを避ける意図があるものと思われる。竪穴住居址は地山を深く掘り込んで作られるものと、非常に浅く段状遺構と分別しがたいものがあり、埋土も異なるところから時期を異にする可能性が高い。

久野々遺跡・おぎわら遺跡で総数15棟以上の竪穴住居址が検出されているが、全て同時期に存在していたものではない。おぎわら遺跡のものはその出土土器から見て久野々遺跡よりも若干古い様相を示している。また、おぎわら遺跡と久野々遺跡の間には大きな谷が入っており、時期的或いは集団として別の集落である可能性をもつ。更に、久野々遺跡の中でも尾根や谷などの地形によっていくつかの小集団にグルーピングすることができる。

方形周溝墓は4基、溝を一部共有して一列に並んだ状況で検出された。方形周溝墓は尾根頂部先端に立地し、竪穴住居址1が埋没した後に構築している。各々の規模は列方向に長く、約4×5mと比較的小型のものである。主体部と思われる土壙は1ヶ所のみ確認できた。

今回の調査（第3・4次調査）ではさほど出土遺物に恵まれていない。また、土器でも一括性のある遺物群は見られないが、おぎわら遺跡や町村会・町教育委員会による調査では大量の土器が出土しており、その中でも比較的一括性の高いものを抽出して掲載している。第4次調査出土の土器の中で特筆するものとしては、脚部の長い製塩土器があり、淡路島でも最も古いもののひとつとして扱われよう。

石器では碧玉製の管玉1点やサヌカイト製の石鏃5点、模形石器1点の他は叩石・砥石などが出土しているにすぎない。山を切り開く石斧や水田耕作に伴う石包丁は見られない。そのかわり出土状況からは確実に弥生時代のものと断定できないが、おぎわら遺跡出土のヤリガンナや、久野々遺跡第3次調査出土の袋状鉄斧など弥生時代に属すると考えてよい鉄製品が出土している。

以上のように久野々遺跡・おぎわら遺跡の弥生時代後期の集落は「時代の趨勢に反した、水稲栽培や日々の居住条件に不適当か不可能な、水田農民にとっていわば異状ともいえる高所を占地した集落」[1]であり、「広義の弥生系高地性集落」の範疇には入る。しかしながら環濠のような大型の溝もなく、わずかしか出土していない石鏃も小型のものが主体を占めていることから、「武器的遺物や防備施設の遺構をもち、軍事的防衛機能をもつ」[1]「狭義の高地性集落」とはいえない。方形周溝墓が集落内に存在した事実は、その集落が単なる逃げ城や見張り台、狼煙台等の戦乱に伴った機能のみを有していたわけではないことを示している。また、おぎわら遺跡や久野々遺跡から出土した多量の土器の存在からも、ほぼ弥生時代後期全般にわたって集落が営まれており、何らかの生産活動を行っていた集落であることが推察される。

今回の久野々遺跡の発掘調査では、弥生時代及び中世の集落の末端をかすめたに過ぎないが、おそらくは現在の民家が立ち並ぶあたりが最も居住に適した位置であろう。久野々の集落では富島川などの山水が確保でき、仁井の地名から見ても清水が湧く場所であったことがわかり、弥生時代の水稲耕作にはかなりの技術が必要であるが、陸稲や畑作物の耕作には適した立地である。久野々遺跡から出土した敲石は同じ淡路島の洲本川流域で同様の立地をもつ大森谷遺跡[2]や寺中遺跡[3]でも磨石や台石等とともに出土しており、コメ以外の食料加工用具の可能性が考えられる。

久野々遺跡・おぎわら遺跡からは木材伐採・加工に使われた鉄斧・ヤリガンナが出土している。これらの鉄製品の普及によってこれまで造出できなかった山間部の開発が進み、また、新たな生業を生み出すことになった。更に、社会的な流通システムが確立したことによってそれまでの自給自足的な集落態勢が崩れ、水稲耕作以外の生業を主とする集落が営まれるようになったことが考えられる。久野々などの集落では水稲以外の商品作物栽培や木製品加工、山の幸の獲得などを主な生業とし、他の集落との交流・交易によって生活していたのであろう。

久野々遺跡・おぎわら遺跡などのように北淡路地域には弥生時代後期にピークをもつ高地性集落が数多く出現する。それに対して対岸の明石川流域や大阪湾を取り囲む山々では弥生時代中期後半にピークを迎える高地性集落も存在する。また、同じ淡路島の洲本川流域で同様の立地をもつ大森谷遺跡や寺中遺跡、森遺跡ではふもとに母集団の拠点集落である下内膳遺跡が存在する。対岸の明石川流域でも多くの高地性集落が確認されているが、やはり低地に母集団の拠点集落が存在する。しかしながら久野々遺跡・おぎわら遺跡と低地の遺跡との関係は全く不明である。この地に集落を営む前にどこにいたのか、また、この地を去ってどこへ行ったのかを知ることができない。

このように今後、これらの周辺遺跡との比較検討、他地域との比較検討をおこなうことによって、弥生社会の変化や中期から後期にかけての変革を追うことができよう。今回の報告もその一資料となることを期待する。

〔参考文献〕

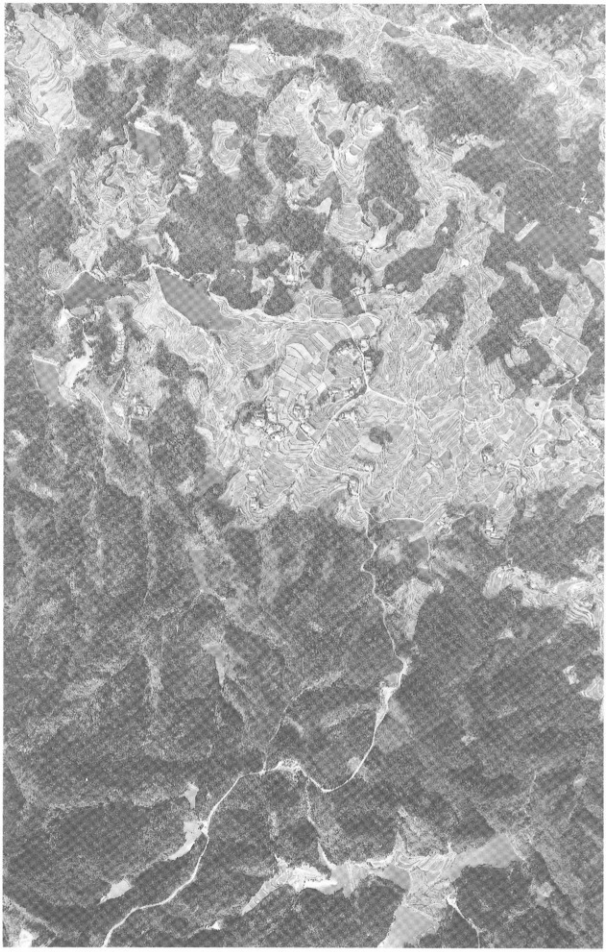
(1) 小野忠熙編「高地性集落の研究」1978 学生社

(2) 別府洋二・市橋重喜他『大森谷遺跡』淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 兵庫県文化財調査報告第27集 1984

(3) 吉識雅仁・岸本一宏他『寺中遺跡』淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 兵庫県文化財調査報告第64冊 1988

図　　版

図版1　航空写真



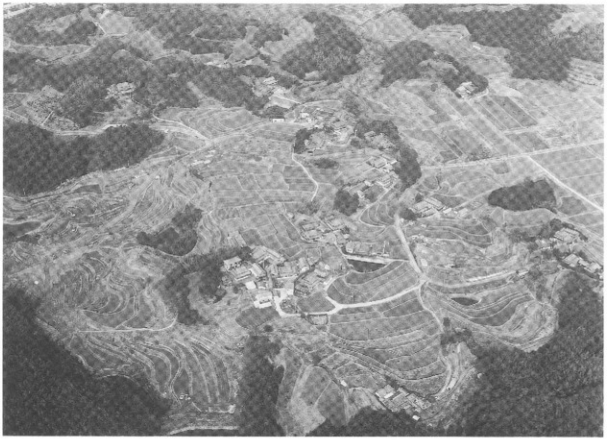
国土地理院撮影写真

図版2　遠景（1）

遠景　〔東から〕

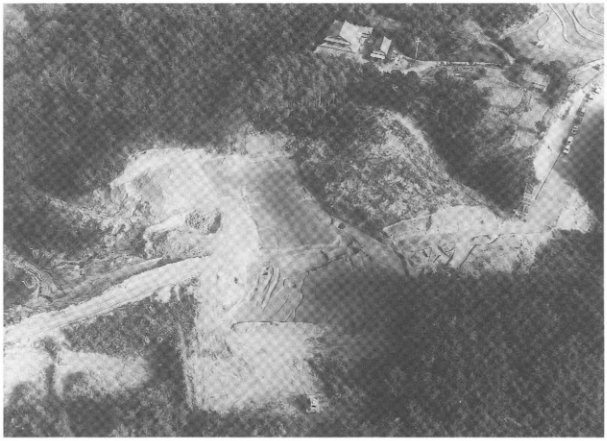
遠景　〔西から〕

遠景　〔南から〕



遠景　〔南西から〕

図版4　おぎわら遺跡／遺構（1）



全景　〔西上空から〕

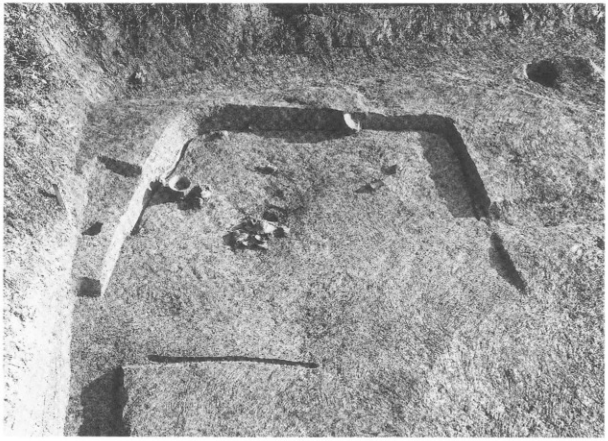
全景　〔北上空から〕

図版5　おぎわら遺跡／遺構（2）

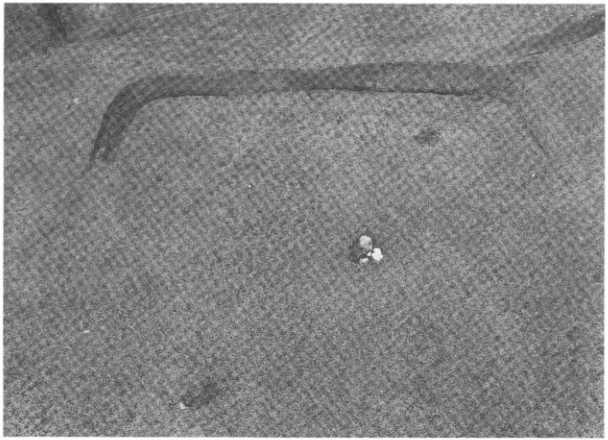
西半部の遺構　〔西から〕

西半部の遺構　〔北東から〕

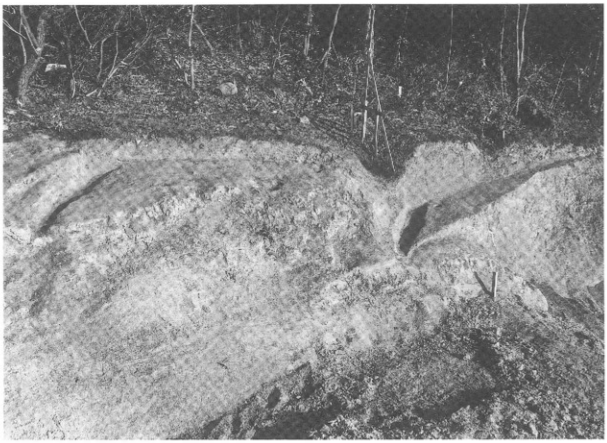
図版6　おぎわら遺跡／遺構（3）



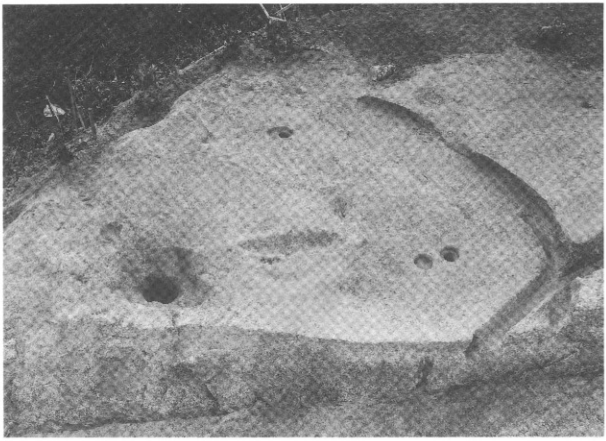
ＳＨ０１　〔北から〕



ＳＨ０２　〔南西から〕

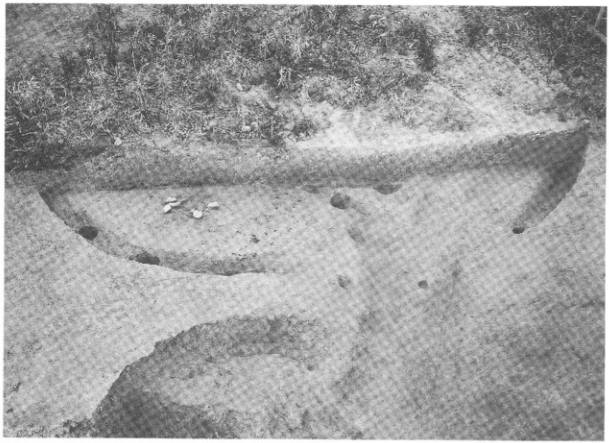


SH03（左）・SH04　〔西から〕

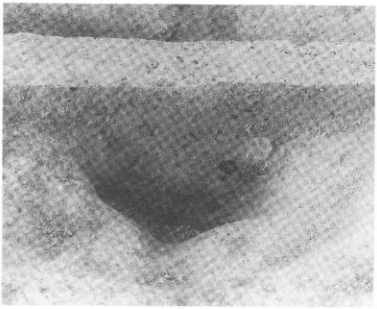


SH05　〔東から〕

図版８　おぎわら遺跡／遺構（５）

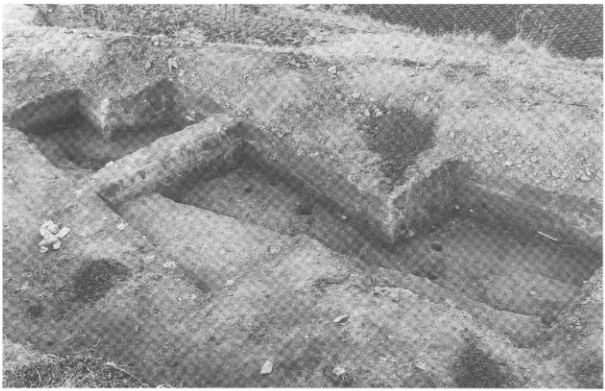


ＳＨ０６　〔西から〕

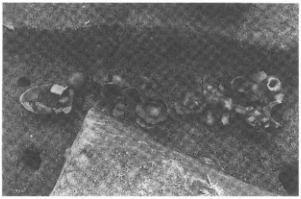


ＳＨ０５中央土抗断面　〔北から〕

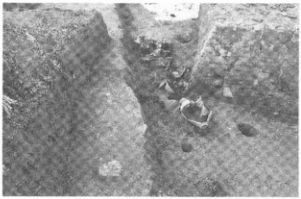
ＳＨ０３土器出土状況　〔西から〕



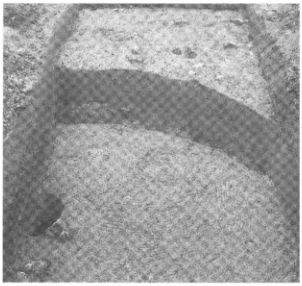
No.15調査区　段状遺構〔南から〕



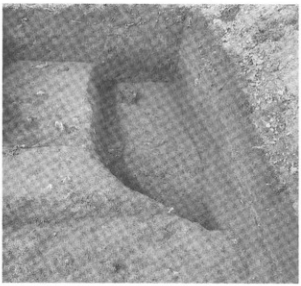
段状遺構　土器出土状況〔北から〕



段状遺構　土器出土状況〔東から〕

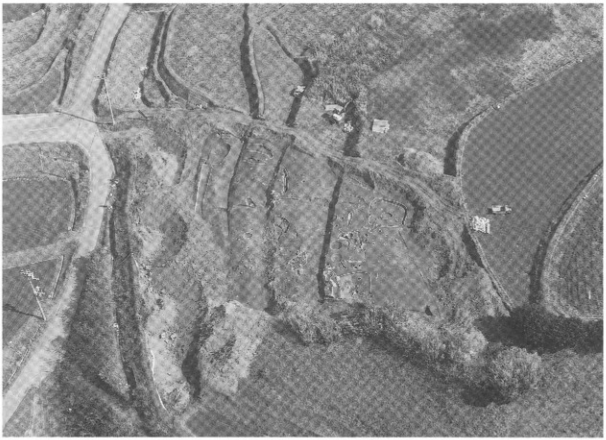


No.１調査区　竪穴住居址〔東から〕

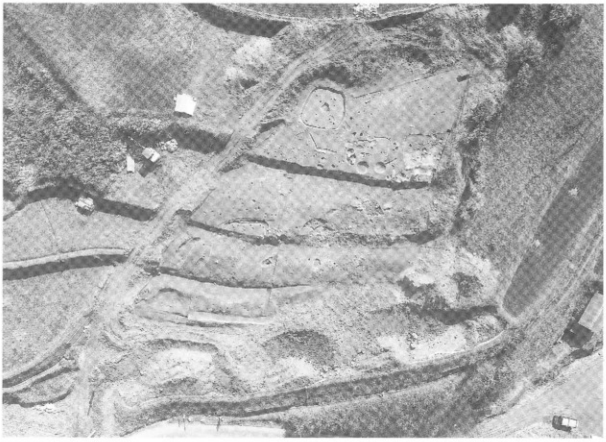


No.２調査区　竪穴住居址〔南から〕

図版10　久野々遺跡（第２次調査）／全景



遠景　〔西上空から〕

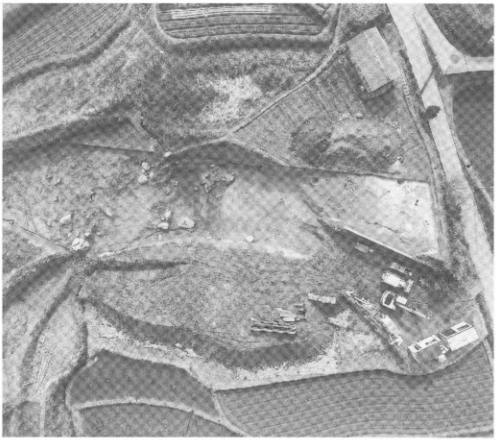


遠景　〔北上空から〕

図版11　久野々遺跡（第３次調査）／遺構（１）

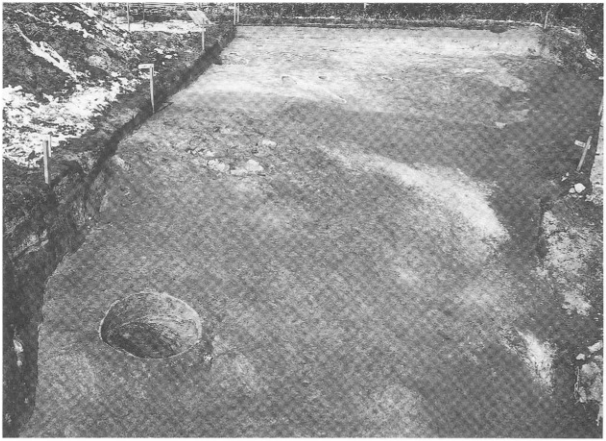
全景　〔上空から〕

図版12　久野々遺跡（第３次調査）／遺構（２）

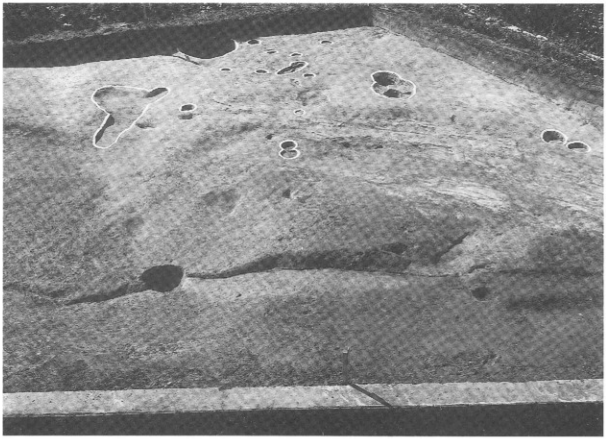


西半部の遺構　〔東上空から〕

西半部の遺構　〔東から〕



西半部の遺構　〔南東から〕



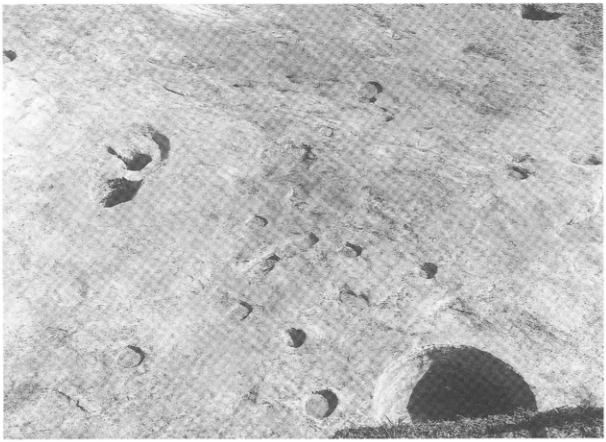
西半部の遺構　〔東から〕

図版14　久野々遺跡（第３次調査）／遺構（４）

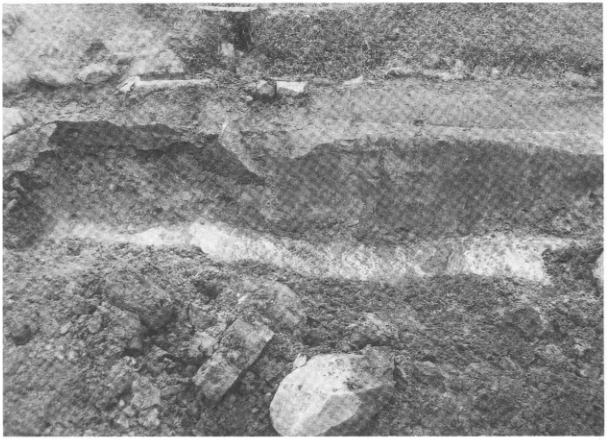
東半部の遺構　〔北西から〕

東半部の遺構　〔北西から〕

図版15　久野々遺跡（第３次調査）／遺構（５）

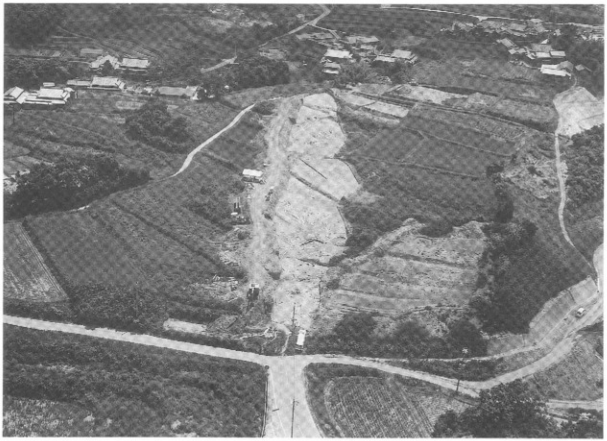


ＳＫ３および柱穴群　〔南西から〕



旧河道断割り　〔北東から〕

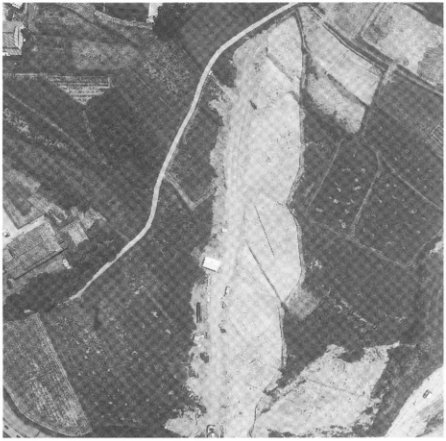
図版16　久野々遺跡（第４次調査）／遺構（１）



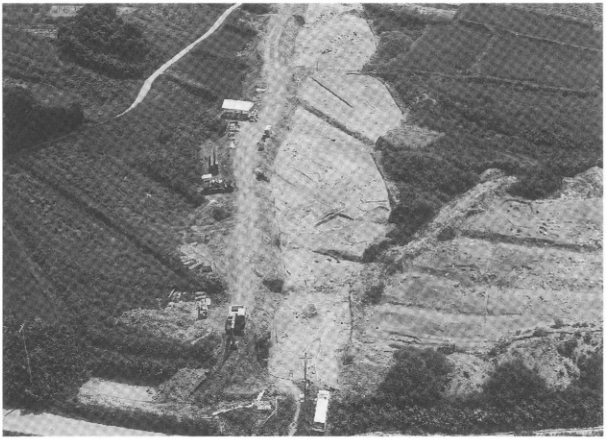
Ⅰ区全景　〔北上空から〕

Ⅰ区調査前全景　〔西上空から〕

図版17　久野々遺跡（第４次調査）／遺構（２）

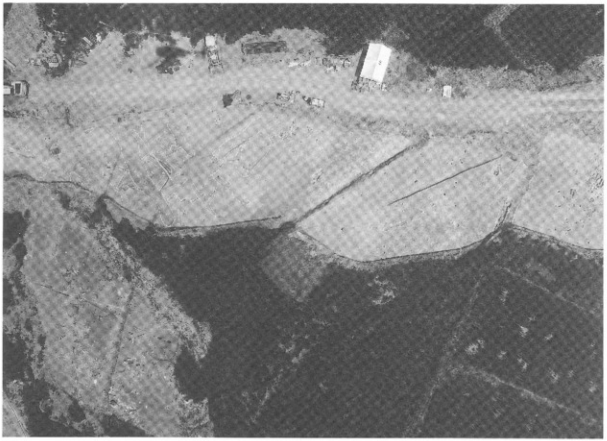


Ⅰ区南半部の遺構　〔南上空から〕

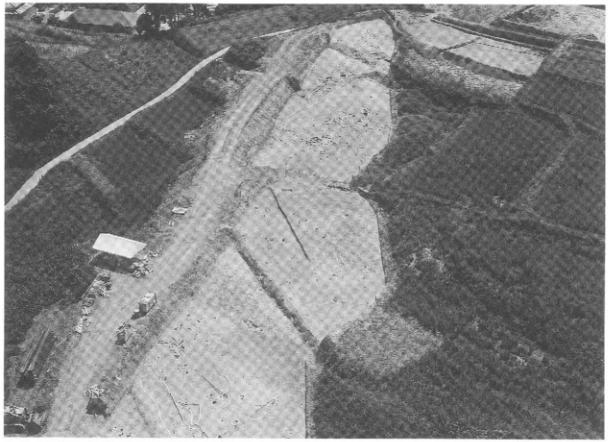


Ⅰ区北半部の遺構　〔北上空から〕

図版18　久野々遺跡（第４次調査）／遺構（３）

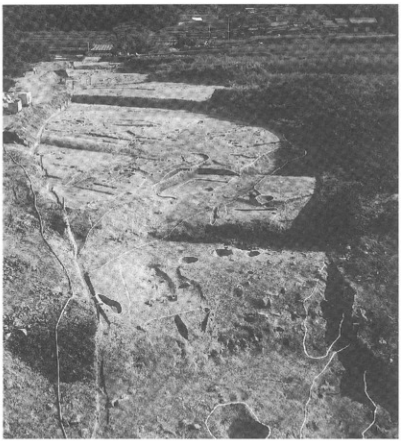


Ⅰ区北半部および町教委調査区　〔西上空から〕

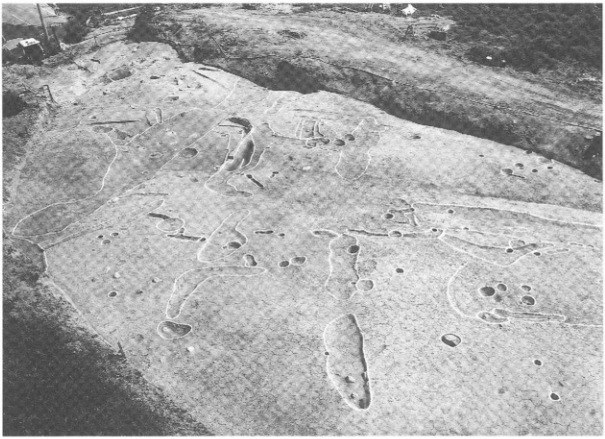


Ⅰ区南半部の遺構　〔北東上空から〕

図版19　久野々遺跡（第４次調査）／遺構（４）

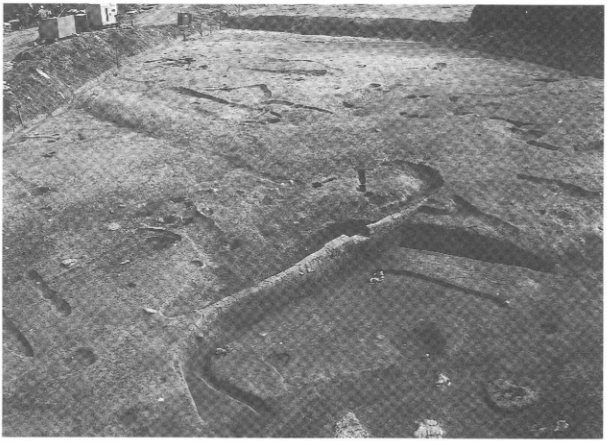


Ⅰ区全景　〔北から〕

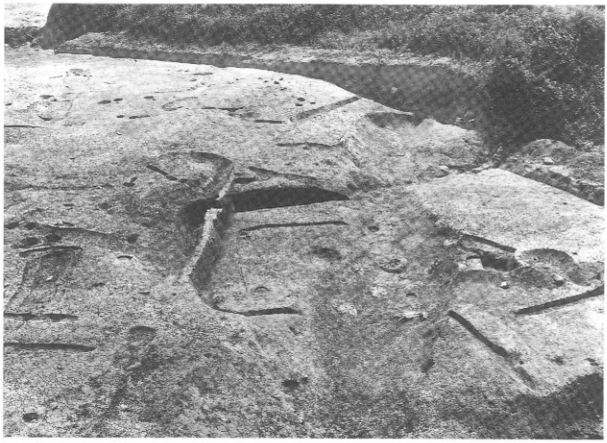


Ⅰ区北半部の遺構　〔南西から〕

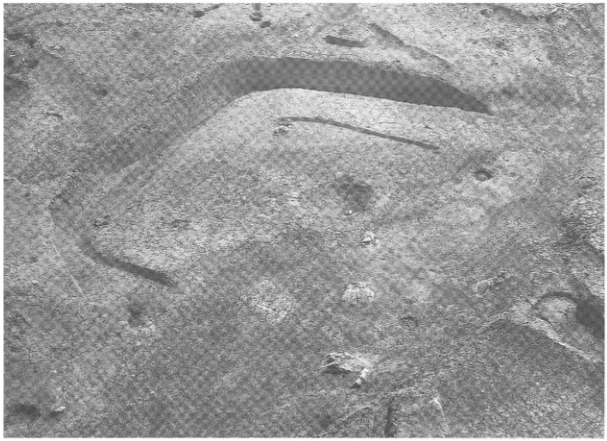
図版20　久野々遺跡（第４次調査）／遺構（５）



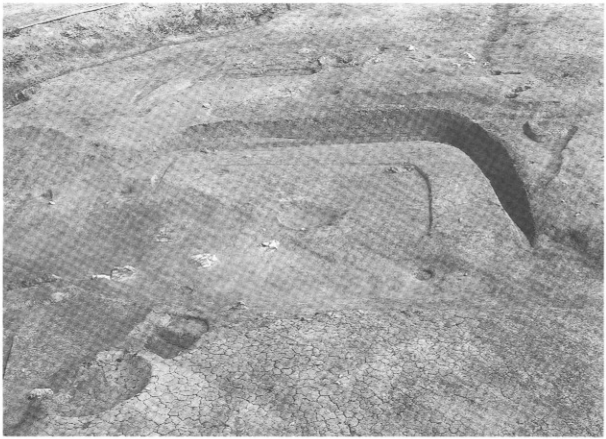
ＳＨ１　〔北から〕



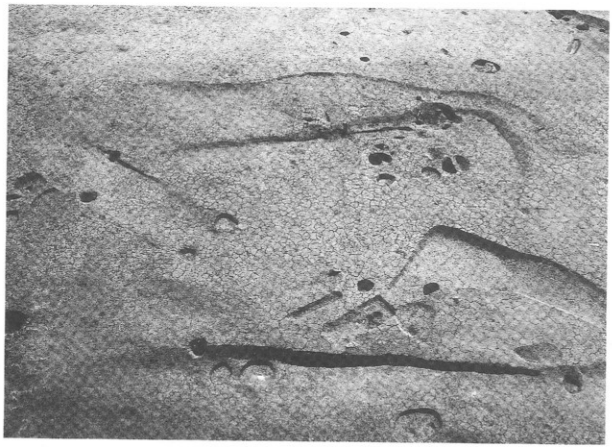
ＳＨ１　〔北東から〕



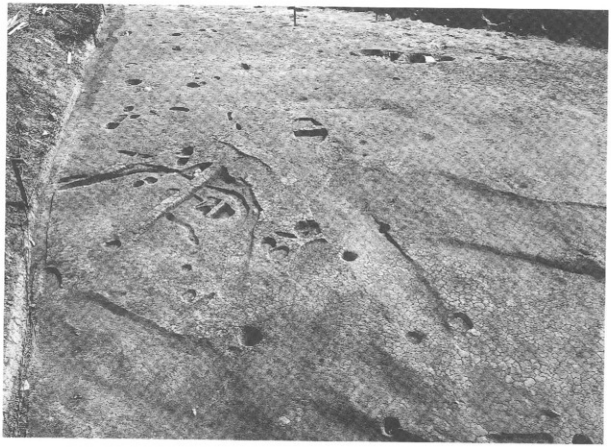
ＳＨ１　〔北から〕



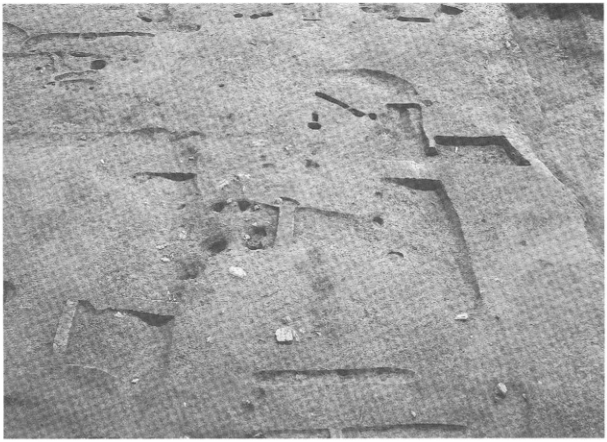
ＳＨ１　〔北西から〕



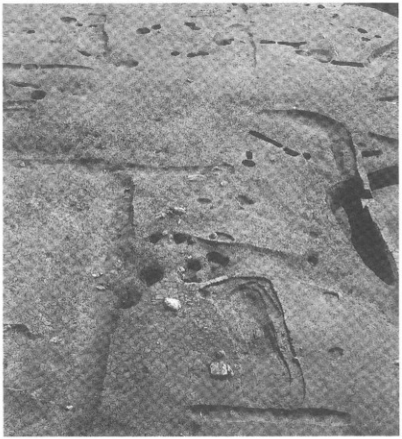
ＳＨ２　〔北から〕



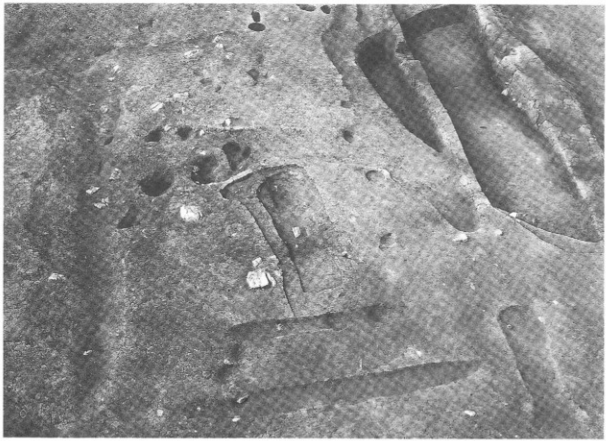
ＳＨ３　〔北から〕



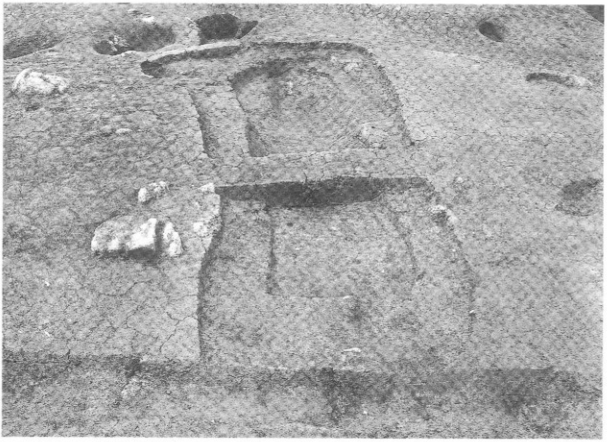
ＳＸ１・２検出状況　〔北東から〕



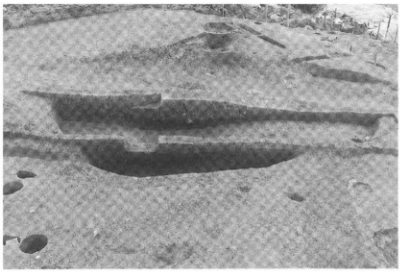
ＳＸ１～４およびＳＫ15完掘状況　〔北東から〕



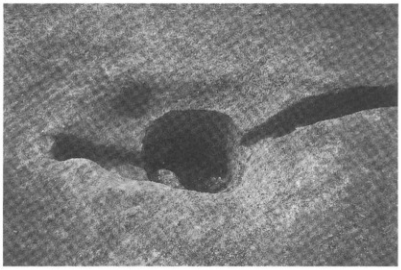
ＳＫ15完掘状況　〔北東から〕



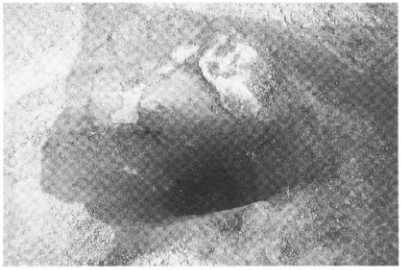
ＳＫ15土層断面　〔北東から〕



ＳＨ１土層断面　〔南東から〕

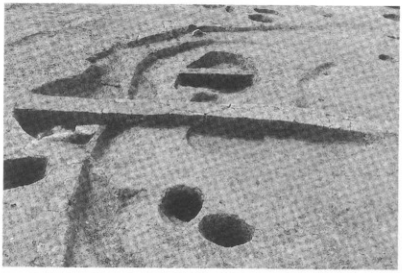


ＳＨ１中央土坑完掘状況　〔北から〕

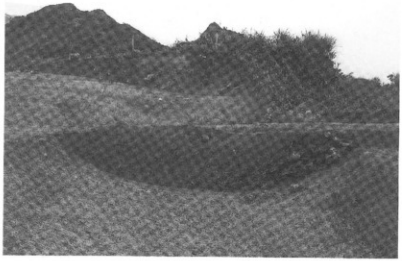


ＳＨ１南柱穴土層断面　〔北西から〕

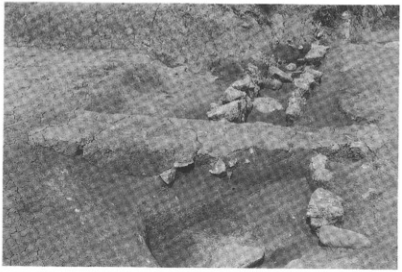
図版26　久野々遺跡（第４次調査）／遺構（11）



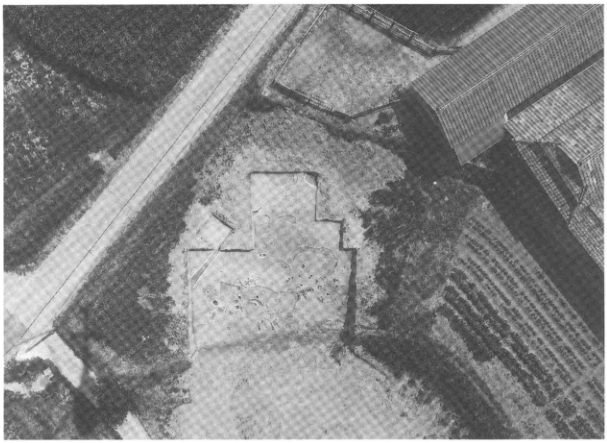
ＳＨ３土層断面　〔南東から〕



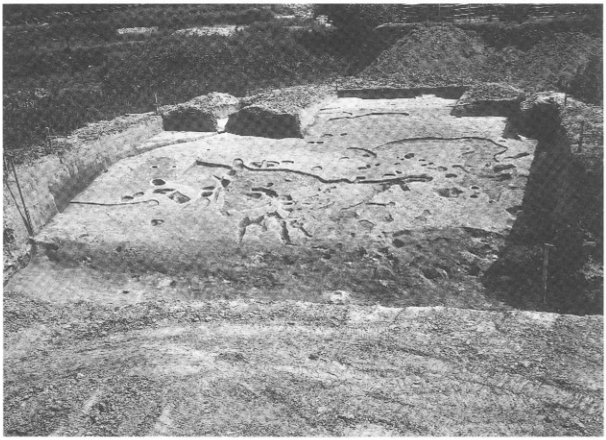
ＳＤ１土層断面　〔北東から〕



ＳＤ19土層断面　〔東から〕

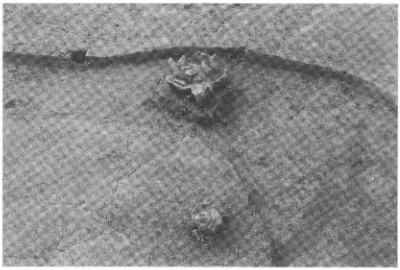


Ⅱ区全景　〔北上空から〕



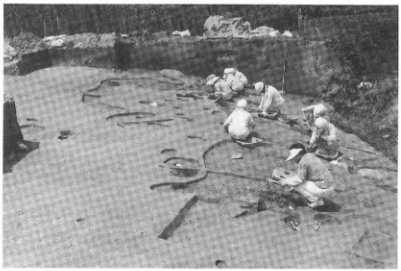
Ⅱ区全景　〔北から〕

図版28　久野々遺跡（第４次調査）／遺構（13）



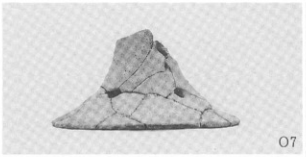
Ⅱ区土器出土状況　〔北から〕

Ⅱ区遠景　〔東から〕



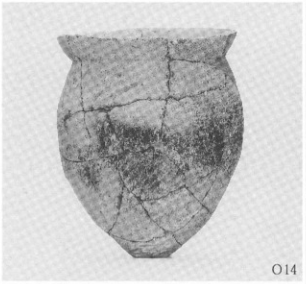
Ⅱ区調査状況　〔西から〕

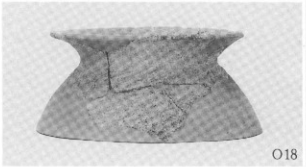
図版29　おぎわら遺跡／土器（1）

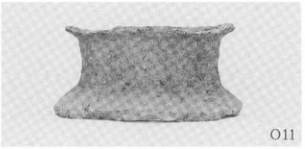

O7

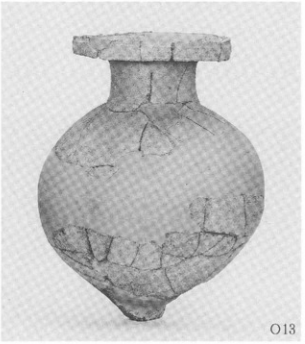
O9

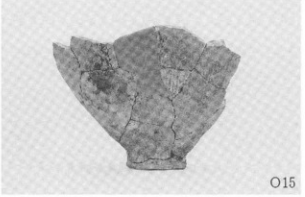
O12


O14


O18

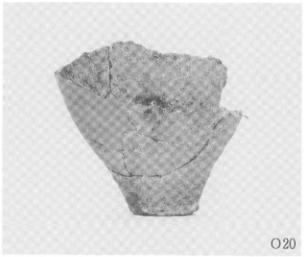

O11

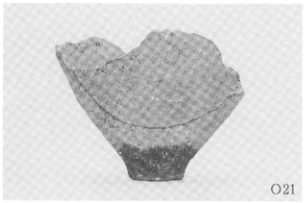

O13


O15

O19

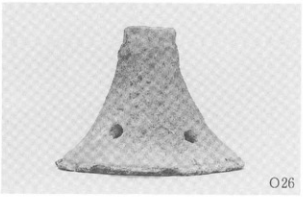
図版30　おぎわら遺跡／土器（２）

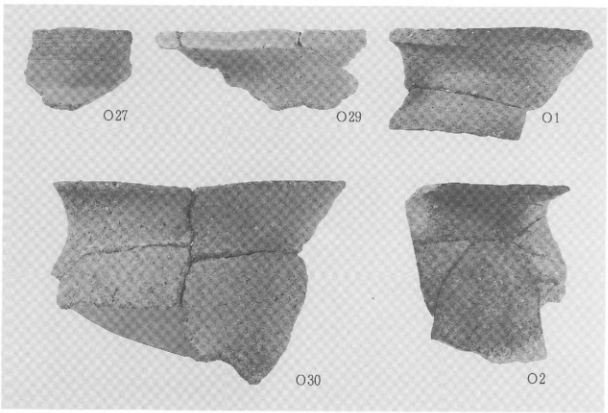

O20


O21

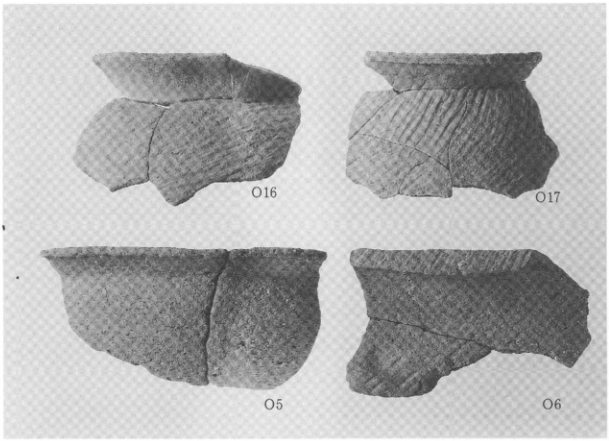
O25

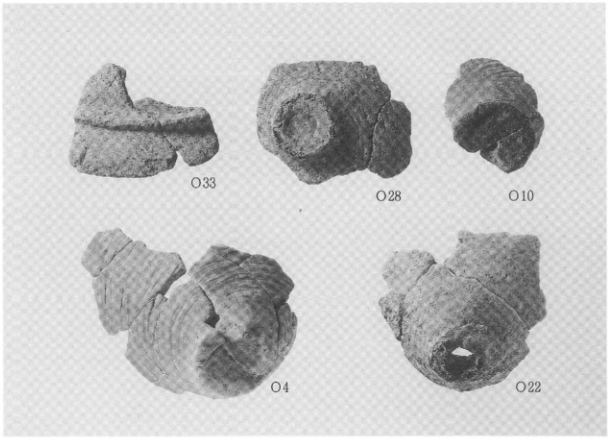
O32


O26

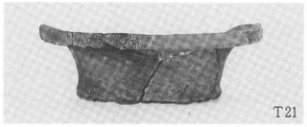


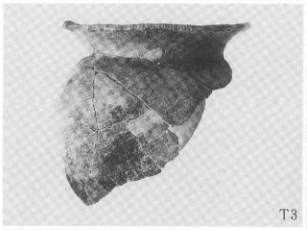
図版31　おぎわら遺跡／土器（3）



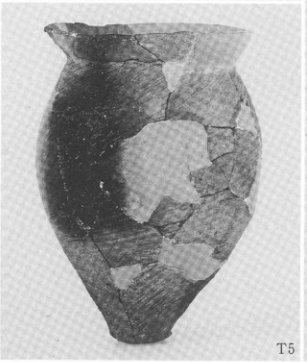


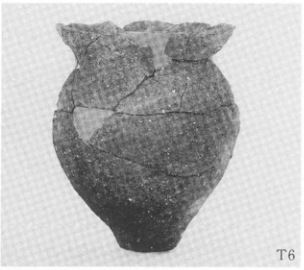
図版32　久野々遺跡（第１次調査）／土器（１）


T21

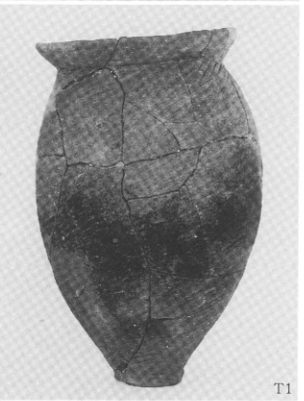

T3

T7

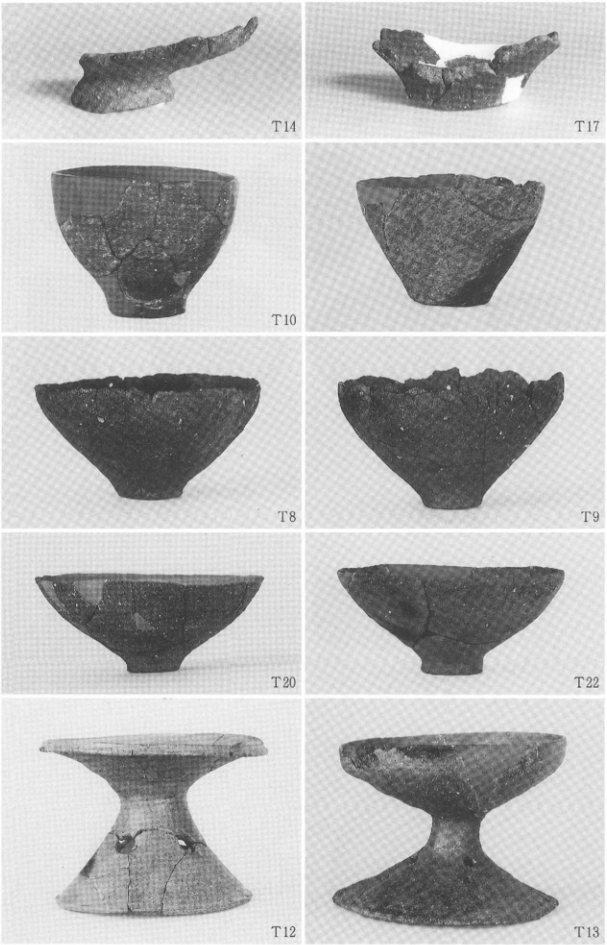

T5


T6

T2

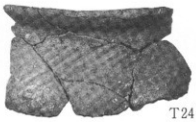

T1

図版33　久野々遺跡（第１次調査）／土器（２）



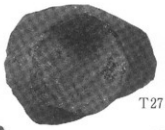
図版34　久野々遺跡（第１次調査）／土器（３）・石器・土製品

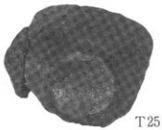
T4


T24

T19

T18


T27


T25

T15

T16

T26

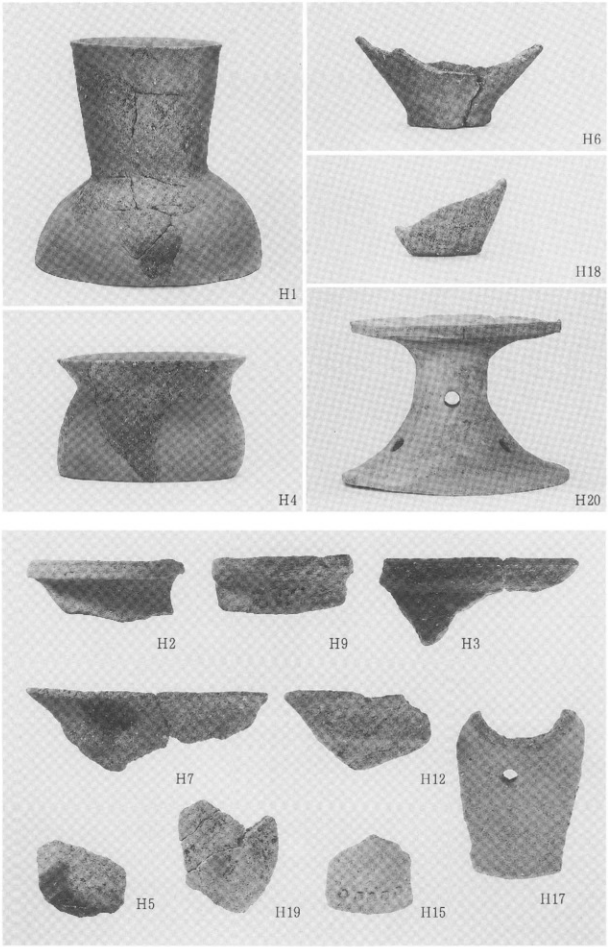
T23

T28

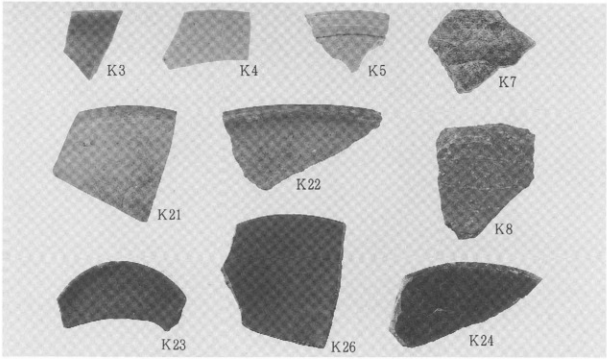
T29

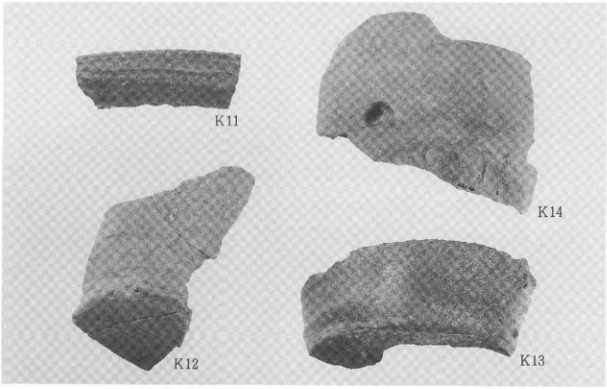
T30

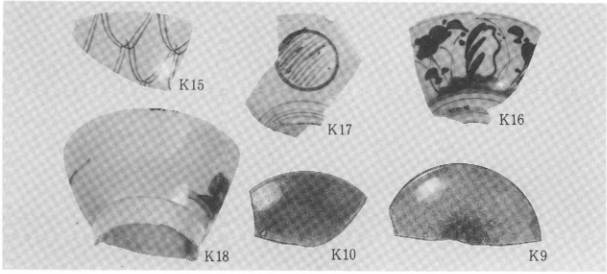
T31


H1
H6
H18
H4
H20
H2
H9
H3
H7
H12
H5
H19
H15
H17

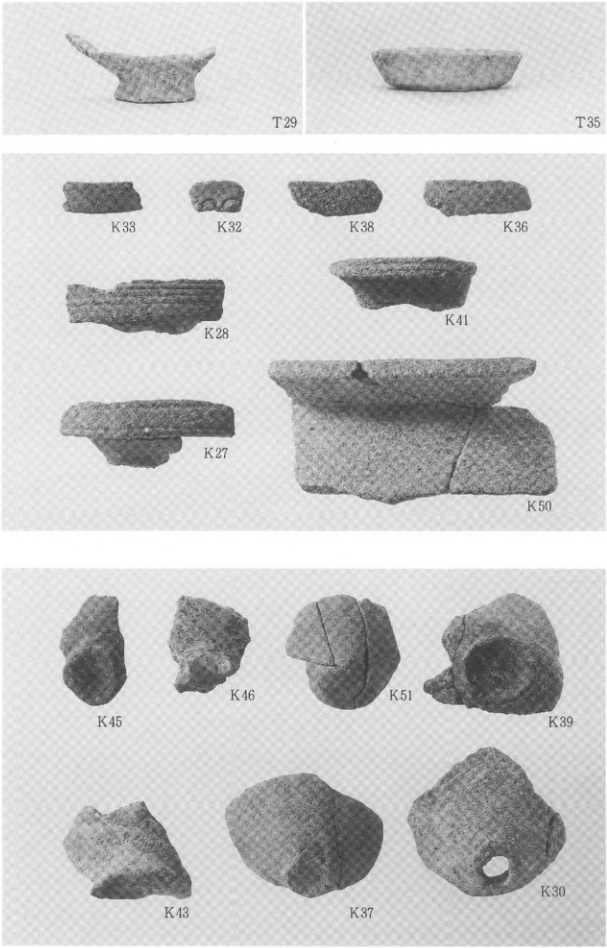
図版36　久野々遺跡（第３次調査）／土器



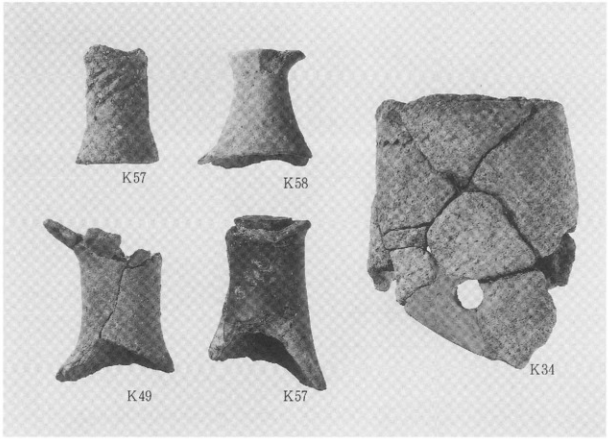


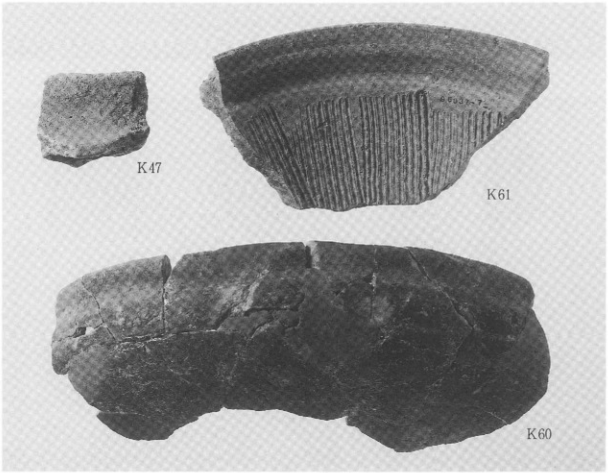


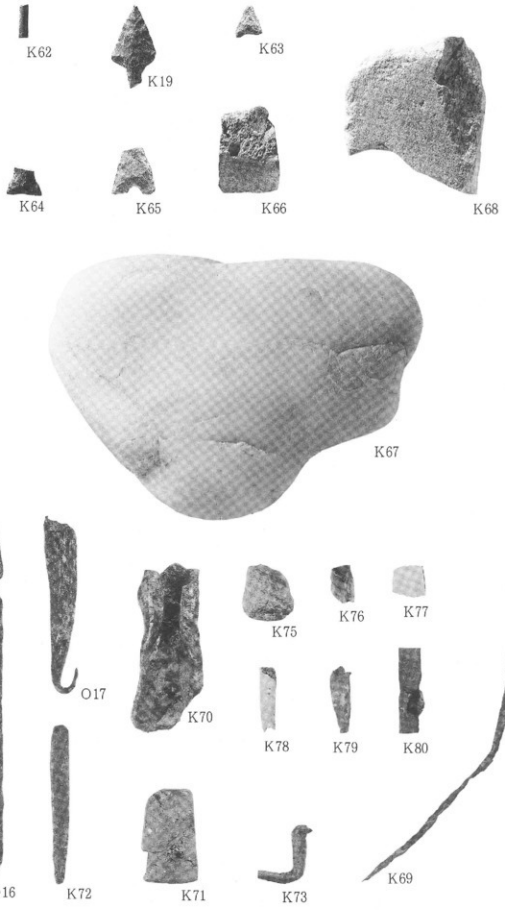
図版37　久野々遺跡（第４次調査）／土器（１）



図版38　久野々遺跡（第４次調査）／土器（２）






K62
K19
K63
K64
K65
K66
K68
K67
O17
K70
K75
K76
K77
K78
K79
K80
O16
K72
K71
K73
K69

報告書抄録

ふりがな	くののいせき
書名	久野々遺跡
副書名	一般農道整備事業（仁井Ⅱ期地区）に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第１６７冊
編著者名	別府洋二・山上雅弘・仁尾一人・服部　寛ほか
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　℡078-531-7011
発行年月日	西暦１９９７（平成９）年　３月　３１日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くののひさのひさの 久野々	ひょうごけんつなぐんほくだんちょう 兵庫県津名郡北淡町久野々	28683	950390 960037 960036	34度31分6秒	134度55分55秒	19960112～19960315 19960520～19960820	1218㎡ 2573㎡	一般農道整備事業（仁井Ⅱ期地区）に伴う調査
おぎわら		28683	880010	34度31分16秒	134度55分55秒	19881024～19881227	2,620㎡	国営農地開発事業（北淡路地区）および県営一般農道整備事業（仁井地区）に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久野々	集落跡	弥生後期	竪穴住居６棟 方形周溝墓４基	土器 石器（石鏃・管玉等） 鉄器（鉄斧）	弥生時代後期の高地性集落
おぎわら	集落跡	弥生後期	竪穴住居６棟 土坑７基 溝21条	土器 鉄器（ヤリガンナ）	一括性の高い後期後半の土器が出土

兵庫県文化財調査報告　第167冊

久野々遺跡

－一般農道整備事業（仁井Ⅱ期地区）に伴う発掘調査報告書－

平成９年３月31日発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
ＴＥＬ　078－531－7011
発　行　兵　庫　県　教　育　委　員　会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
印　刷　株式会社　精　文　舎